

中 前 後 谷 遺 跡

— 小豆崎地区畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

2 0 1 0 年

諫 早 市 教 育 委 員 会

発刊のことば

秀峰多良連山から派生する丘陵の多くには、古くからの遺跡がたくさん存在しています。標高で400m前後には川頭遺跡や山茶花遺跡、標高200m前後には原ノ堤遺跡、犬木溜池遺跡、菅牟田遺跡、田原池遺跡などの遺跡があります。

これらの遺跡名には溜池とか堤とかの語句が入っているのは、多良連山に降った雨水が地表下に浸透し、さらに地下水となって伏流した水が地表に現れた、すなわち湧水点近くに存在していたことを示しています。

今回報告します中前後谷遺跡は、さらに標高が低い丘陵先端部近くに立地していますが、近くには小豆崎溜池が存在しており、やはり湧水地点があったものと想定されます。この湧水を頼みに多くの遺跡が存在していたと言われていますが、その主体は狩猟採集の経済段階の遺跡、畑作さらに稲作農耕の経済段階の遺跡ですが、今次の報告は畑作に主眼を置いた段階の遺跡と想定されます。

このように私たちの祖先が残した遺跡には、いろいろな経済段階のものが存在しており、これらの営々とした営みが、私たちに繋がっていることを、その遺構や遺物を目の当たりにしたとき実感することができます。

考古学は遺跡から発見される住居跡や貝塚などの遺構や、土器や石器などの遺物をとおして各時代の社会的・文化的・宗教的背景を復元し、その背景にある「ひと」を追及する学問です。

今回報告します中前後谷遺跡の情報が、皆さんの郷土史研究や、学問の進展にいささかでも寄与するところがあれば、幸甚に存じます。

最後になりましたが本調査に関し諸種のご指導をいただきました長崎県県央振興局をはじめいろいろなご協力を頂きました地元自治会長、地権者各位に衷心から感謝申し上げます、発刊のことばといたします。

平成22年 3月31日

諫早市教育委員会
教育長 平野 博

例 言

1. 本書は平成19年度、20年度に実施した小豆崎地区畑地帯総合整備事業に伴う中山遺跡、正津遺跡の範囲確認調査、中前後谷遺跡の本調査の報告である。
2. 範囲確認調査は長崎県農村整備事務所（現長崎県県央振興局）の依頼を受けて、諫早市教育委員会が実施した。
3. 本調査は長崎県農村整備事務所（現長崎県県央総合整備事務所）の依頼を受けて諫早市教育委員会が実施し、現地調査は扇精光株式会社が行った。
4. 調査期間は次のとおりである。

範囲確認調査 平成19年8月2日から同年11月14日まで。

本 調 査 平成20年12月17日から平成21年3月4日まで。
5. 調査整理業務は長崎県県央振興局から依頼を受けて諫早市教育委員会が行った。
6. 範囲確認調査において採用した方位は磁北であり、高度は標高である。
7. 本調査で採用している方位は真北であり、高度は標高である。
8. 範囲確認調査及び本調査において出土した遺物類、記録した写真・図画類は諫早市教育委員会が諫早市郷土館で保管している。
9. 本書の編集は秀島が行い、執筆は深川、秀島が行った。

本文目次

I	遺跡の地理的・歴史的環境	1
1.	遺跡の地理的環境	1
2.	遺跡の歴史的環境	4
II	調査にいたる経緯と調査組織	12
1.	調査に至る経緯	12
2.	調査組織	12
III	範囲確認調査の記録	17
1.	調査の方法及び経過	17
2.	土層と検出された遺構、遺物	18
- 1.	土層	18
- 2.	検出された遺構	19
①	福田町649-1番地	19
②	福田町649-2番地	21
③	福田町727番地	22
④	福田町744番地	23
⑤	小豆崎町1152番地	26
⑥	小豆崎町1427番地	28
⑦	中田町612番地	31
⑧	中田町622-2番地	32
- 3.	検出された遺物	33
3.	範囲確認調査の総括	36
IV	本調査の記録	37
1.	調査の方法及び経過	37
2.	調査組織	38
3.	1区の調査	41
- 1)	土層概要	41
- 2)	ドット・マップ	45
4.	2区の調査	45
- 1)	土層概要	45
- 2)	遺構	45
5.	3区の調査	50
- 1)	土層概要	50
- 2)	遺構	50

6. TP10	53
7. TP13	54
8. 検出された遺物	55
V 総括	73

挿図目次

第1図 諫早市位置図	1
第2図 諫早市管内図	2
第3図 諫早郷図	3
第4図 上野町遺跡	7
第5図 沖城跡	7
第6図 諫早農業高校遺跡	8
第7図 小栗C地点遺跡	8
第8図 周辺遺跡図 (S-1/25,000)	10
第9図 範囲確認調査地点図 (S-1/5,000)	15
第10図 小豆崎町1398番地Sトレンチ西壁土層図 (S-1/40)	18
第11図 福田町649-1番地遺物出土平面図・投影図・土層図 (S-1/60)	19
第12図 福田町649-2番地土層図 (S-1/40)	21
第13図 福田町727番地土層図・遺構実測図 (S-1/20、1/40)	22
第14図 福田町744番地土層図・遺構実測図 (S-1/40)	25
第15図 小豆崎町1152番地Nトレンチ、ミゾ実測図 (S-1/40)	26
第16図 小豆崎町1152番地Mトレンチ遺構実測図 (S-1/40)	27
第17図 小豆崎町1427番地Nトレンチ土層図・遺構実測図 (S-1/40)	29
第18図 小豆崎町1427番地Sトレンチ土層図・遺構実測図 (S-1/40)	30
第19図 中田町612番地Mトレンチ土層図・遺構実測図 (S-1/40)	31
第20図 中田町622-2番地土層図・遺構実測図 (S-1/20、1/40)	32
第21図 範囲確認調査検出遺物実測図 (1~8はS-2/3、9~13は1/3)	35
第22図 中前後谷遺跡調査前地形図 (S-1/5,000)	39
第23図 グリッド配置図 (S-1/1,000)	40
第24図 G・Hグリッド、ドット・マップ (S-1/20)	41
第25図 1区平面図 (S-1/400)	43
第26図 1区土層図 (S-1/80)	44
第27図 2区平面図 (S-1/400)	47
第28図 2区土層図 (S-1/80)	48

第29図	2区土壌配置図及び平面・断面図 (S-1/40、1/800)	49
第30図	3区平面図及びミゾ断面図 (S-1/40、1/400)	52
第31図	福田町727番地集石実測図 (S-1/20)	53
第32図	福田町744番地遺構実測図 (S-1/40)	54
第33図	石鏃形態分類図	63
第34図	遺物実測図1 (S-1/3)	65
第35図	遺物実測図2 (S-2/3)	66
第36図	遺物実測図3 (S-2/3)	67
第37図	遺物実測図4 (S-2/3)	68
第38図	遺物実測図5 (S-2/3)	69
第39図	遺物実測図6 (S-2/3)	70
第40図	遺物実測図7 (50~78はS-2/3、79は1/3)	71

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	11
第2表	範囲確認調査トレンチ別進捗一覧表	13
第3表	福田町649-1-Nトレンチ出土遺物一覧	20
第4表	福田町744番地遺構一覧 (単位: cm)	24
第5表	小豆崎町1152番地Mトレンチ、ピット一覧表 (単位: cm)	28
第6表	範囲確認調査遺物計測表	35
第7表	1区出土遺物集計表	42
第8表	2区出土遺物集計表	46
第9表	3区出土遺物集計表	50
第10表	ドット・マップ取上遺物一覧	51
第11表	石鏃形態分類表	62
第12表	本調査遺物計測表	72
第13表	風観岳支石墓群、高場遺跡、中前後谷遺跡石鏃比較表	74

図版目次

図版1	中前後谷遺跡調査前全景 (北から)
図版2	中前後谷遺跡調査後全景 (北から)
図版3	中前後谷遺跡調査前全景 (南から)

- 図版 4 中前後谷遺跡調査後全景（南から）
- 図版 5-1 小豆崎町1398・Sトレンチ西壁
- 2 福田町649-1・Nトレンチ遺物出土状況
- 図版 6-1 福田町649-1・Sトレンチ西壁
- 2 福田町649-2・Sトレンチ南西壁
- 図版 7-1 福田町727 遺構検出状況
- 2 福田町727 遺構検出状況
- 図版 8-1 福田町727 遺構検出状況
- 2 福田町727 遺構完掘状況
- 図版 9-1 福田町744 遺構検出状況
- 2 福田町744 焼土壌
- 図版10-1 小豆崎町1152・Mトレンチ
- 2 小豆崎町1152・MトレンチPit 7 半割状況
- 図版11-1 小豆崎町1427・Nトレンチ 遺構検出状況
- 2 小豆崎町1427・Nトレンチ 須恵器片出土状況
- 図版12-1 小豆崎町1427・Nトレンチ 須恵器片出土状況
- 2 中田町612・Mトレンチ 遺構検出状況
- 図版13-1 中田町622-2 土壌検出状況
- 2 中田町622-2 土壌半割状況
- 図版14-1 2区S K 7 検出状況
- 2 2区S K 7 半割状況
- 図版15-1 中前後谷遺跡3区ミゾ・ベルト1土層断面
- 2 中前後谷遺跡3区ミゾ・ベルト2土層断面
- 図版16-1 範囲確認調査出土遺物（1～13）
- 2 本調査出土遺物（1～15）
- 図版17-1 本調査出土遺物（16～30）
- 2 本調査出土遺物（31～45）
- 図版18-1 本調査出土遺物（46～59）
- 2 本調査出土遺物（60～79）
- 図版19-1 本調査出土遺物（1～5）
- 2 本調査出土遺物（6～9）
- 図版20-1 本調査出土遺物（6～9）裏面
- 2 本調査出土遺物7の側面
- 3 本調査出土遺物3の裏面
- 4 本調査出土遺物8の側面
- 5 本調査出土遺物9の側面

I 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 遺跡の地理的環境

多良岳火山は長崎県と佐賀県の県界に位置しており、東西約24km、南北約34km、面積約590km²を測る。最高峰は経ヶ岳で1,075.5mを測り、概して低い山塊である。

多良岳火山の基盤は古第三紀砂岩層と第三紀安山岩類であり、上位に更新世前期～中期の豊肥火山活動の産物である安山岩類と、さらに更新世中期～後期の山陰系角閃石安山岩が山体を形成している。

本遺跡北方には標高1,057mの五家原岳が屹立するが、この山頂から南の諫早湾に向けて幾筋もの山稜と開析谷を刻む山塊は、おおまかに標高400m前後までは約5度強で標高を逡減し、さらに標高400m以下では3度強の傾斜角で海中に没する。標高300m前後には川頭などの湧水点がわずかに見られ、さらに200m前後では湧水点は倍増する。これらの湧水点は現在溜池として灌漑の用に供されているが、その数は微々たるものであり、十分な用水確保は旧来から困難であったろう。このため、溜池周辺を除けば水田可耕地は僅少であり、畑作に主眼をなした農業形態であったことが首肯されるのである。

また、本市を貫流する本明川は、富川に源流を發し、下大渡野町あたりで流れを東に変え市内に流れ込んでいる。市中央部の諫早公園付近で古第三紀砂岩層に遮断され、北側に中洲を形成している。この中洲の形成により流れは南の諫早高校や諫早市役所方へ南東流し、多くの転石を堆積して、南側への流れを遮断した。このため、本明川の流路は北側、すなわち五家原岳から延びる丘陵地の海への沈降部を流れ、狭小な扇状地を流失させることとなった。このため、本明川北側には可耕地となるべき有明海の火山性沈積物が發達せず、近世期にいたるまでも貧弱な可耕地しか存在しなかったのである。

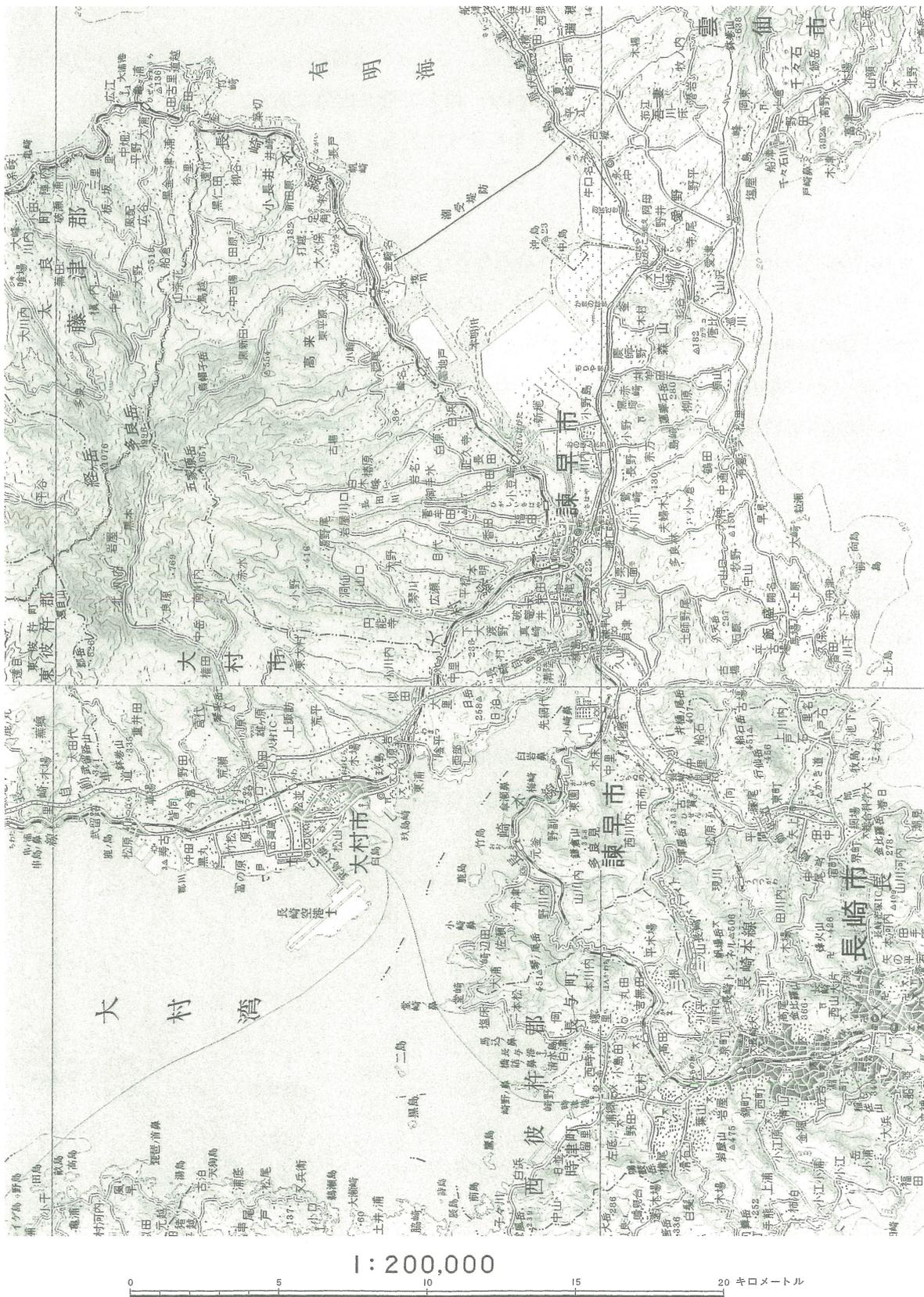
参考に元禄14年頃の成立と思われる『郷図』（第3図）には丘陵地先部の書き込みは狭小であり、一次産業でも畑作に依存した産業形態であったことを示唆している。小豆崎と西里の間を南北走る道路に面して「シャウツ」までは「配分田」、「配分畑」として彩色され、また東に隣接して西里には「御蔵入畑」として彩色がなされている（注1）。正津北方の西里側に畑が存在するほかは、山林としての彩色がなされている。また現在の小豆崎溜池の書き込みは見られず、北側周辺に「配分畑」が存在している。

今回の調査対象地である諫早市福田町から西里町にかけて展開する約50haは東経130° 3′ 50″～4′



第1図 諫早市位置図

30°、北緯32° 51' 30"~52' に位置しており、そのほとんどが畑地であり、水田は御手水町から引水した大井出、菅牟田溜池や小豆崎ため池から取水可能な部分に限られている。



第2図 諫早市内図 (国土地理院発行20万分の1「長崎」、「熊本」より調整)



郷図中に記載している「凡例として」

- | | | | |
|-------------|-----------|-------------|--------------|
| △此浅黄三角小豆崎印 | ○黄者村黄筋者郡境 | ○薄と路者配分田 | ○草之志留者配分山野土居 |
| △此朱三角中山村印 | ○朱筋者道 | ○濃香色者御蔵入畑 | ○久ん志やう者池川 |
| △此黒三角福田村配分印 | ○白筋者領堺村境 | ○薄香色者配分畑 | ○阿いらう之所者海 |
| ○此朱丸福田村印 | ○濃と路者御蔵入田 | ○録青者御蔵入山野土居 | ○紫者他領 |

第3図 諫早郷図

2. 遺跡の歴史的環境

小豆崎地区畑地帯総合整備事業の施行範囲は、福田町中山から小豆崎町、中田町、西里町に及んでいる。

旧中山村は、福田村の北東に位置し、初め佐賀藩親類同格諫早家の大配分地として存在し、『慶長絵図』には「長田ノ内 中山」と見える。しかし慶長期から元和期までのうちに佐賀本藩に三部上地の一村として組み入れられ、のち佐賀藩家老深堀鍋島家領になったとされる。『正保国絵図』では中山村として高32石余、『元禄国絵図』でも高32石余、『大小配分石高帳』では地米高32石余と記載される。安政2年の『佐賀領郷村帳』では深堀私領分と見える。

旧小豆崎村は、現在の小豆崎町、中田町、西里町を含んでいる。大正7年の『北高来郡長田村郷土誌』によれば、天正元（1573）年東房紀守が祖先の菩提を弔い、武運長久を祈るため城跡に堂宇を建立し、法輪山妙本庵と称したという。同15年の龍造寺家晴の諫早攻めにより東氏は滅び、この寺庵も破却されたという。近世初期には佐賀藩親類同格諫早家の大配分地として存在し、佐賀本藩に三部上地の一村として組み入れられたという。『正保国絵図』では小豆崎村として高165石余、『玄梁院代配分村付帳』では地米高120石余、天明7（1787）年の『佐賀領村々目録』では高165石余と記している。

また、『諫早日記』天保3（1832）年記事に載せる「文政11（1828）年高来郡諫早郷大小配分御点役除米帳」（注1）には、

「 一 地米 749石6斗4升8合 北多良村・南多良村
 一 地米 644石4斗3升1合 北糸岐村・南糸岐村
 （中略、以下35村の地米高を記載する。）

合地米 10,480石

内

除米	209石6斗	大庄屋料
同	838石4斗	小庄屋料
同	480石	諫早札馬料
同	312石2斗3升	湯江宿継料
同	618石5斗4升9合	多良・矢上宿継料
合除米	2,458石7斗7升9合	
残役米	8,021石2斗2升1合	

小配分

一 地米	<u>160石8斗1升8合</u>	<u>小豆崎村、西長田村</u>
内		
除米	12石8斗6升5合	小庄屋料
同	3石2斗1升6合	大庄屋料
同	5石9斗1升1合	多良・矢上宿継料

合除米	21石 9斗 9升 2合	
残役米	138石 8斗 2升 6合	
都合地米	1,064石 8斗 1升 8合	
内		
除米	212石 8斗 1升 6合	大庄屋料
同	851石 2斗 6升 5合	小庄屋料
同	480石	諫早札馬料
同	312石 2斗 3升	湯江宿継料
同	624石 4斗 6升	多良・矢上宿継料
合除米	2,480石 7斗 7升 1合	
残役米	8,160石 4升 7合	
内		
役米	8,021石 2斗 2升 1合	大配分
同	<u>138石 8斗 1升 6合</u>	小配分」

と記載している（下線は編者による。以下同じ）。

次に光富論文に挙げる嘉永6（1853）年の『大小配分石高帳』では、鍋島主水（佐賀藩家老横岳鍋島家）分として

「一物成	3,000石	
内		
高来郡		
地米	<u>120石 8斗 1升 8合</u>	小豆崎村
同	40石	中山村
同	205石 5斗 6合	地無シ
高来郡三ヶ村地米		
	366石 6斗 2升 4合	」

と載せている。

以上は小配分としての物成高を指しているが、地目別の面積が判明していないので、光富論文をさらに援用する。これは明治2年作成の『高来郡小配分小豆崎村竈人別帳』と称する史料で、原本は九州大学九州文化史研究施設に保管されている。

明治2年次の竈数（世帯）は79、人口は男性161人、女性185人で合計346人である。

光富論文中、第2表に掲載された所有者別の地目別土地面積は、田37町7反9畝8.33歩、畠35町8反6畝9.5歩、畔17反2畝12.5歩、屋敷10反5畝8.5歩で合計76町4反4畝2.58歩となっている。この地米が272石4升6合である。ただし所有者が小豆崎だけでなく、他村にも所有している可能性があり、事実隣村の福田に所有地を有するものもいる。よってこの集計は小豆崎村内に所在する地目別の土地面積の総計ではなく、さらに同論文第11表において「明治2年、

小豆崎村の田畠面積、地米高一覧」として集計されている。これによれば、「御本方目安前 田畠29町4反8畝20歩 地米160石8斗1升8合」、「御本方出来方目安前 田畠 21町5反2畝1.5歩 地米54石1斗7升1合」、「新地方山方目安前 田畑 15町4反4.5歩 地米30石2斗7升2合」、合計「66町4反26歩 地米245石2斗7升8合」となり、このうちから「除地米 右者田方其外年々否」すなわち災害などの除地米を差し引いて「地米219石2斗6升3合」となっている。『諫早日記』天保3（1832）年記事に載せる「文政11（1828）年高来郡諫早郷大小配分御点役除米帳」や『大小配分石高帳』と比較すると数字の違いが大きいように見られるが、本史料は土地全体が生産する生産高であり、前記二史料は小配分として受領する物成高の違いを示している。これによれば前記二史料には土地の面積の記載が無いが、本史料との面積差が無いと仮定して試算すると、4ツ成りで鍋島主水分は積算されているようである。

以上いくつかの史料によって小豆崎の土地利用のあり方を見てきたが、本地域においては田畑が面積においては合い半ばする状態が藩政時代より継続していることが判明し、またこのことは本明川や多良特有の地形によってもたらされた自然地理的要因が関係していることが示唆されるのである。

次に、本遺跡周辺の遺跡について若干瞥見してみたい（第8図）。

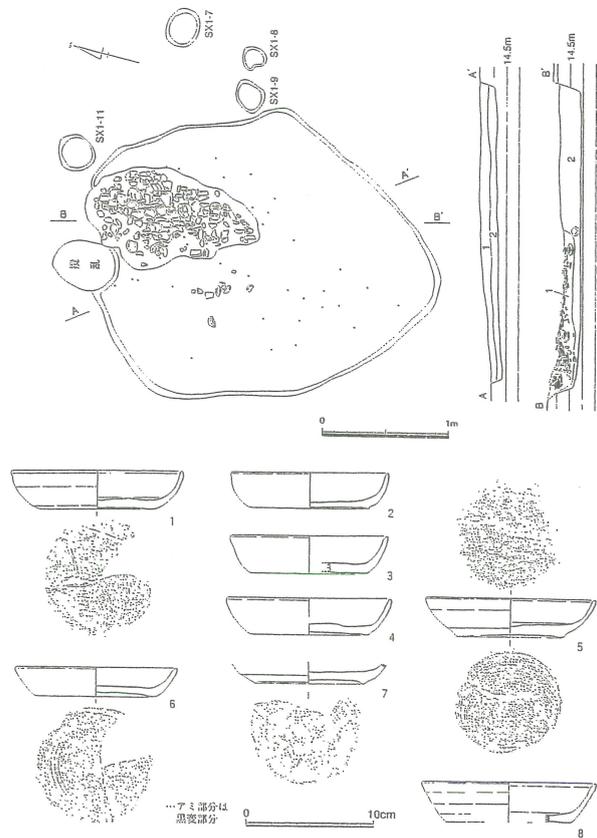
9 中山遺跡：平成3年に実施した調査で、敷石遺構、集石遺構、石積遺構、石列遺構と全て石を使った遺構が検出された。特に敷石遺構は幅1m、長さ20mと大規模なものであり、根石を据えてその上に石を敷く手法で、高さを目的とした遺構ではない。これらの遺構は出土遺物により中世末～近世初頭と考えられる。また、北宋～元代の青・白磁も出土し、周辺には立石氏の館跡と思われる遺跡（11 立石氏館跡）もあり、中・近世にかけての要衝地であったことを彷彿させる（注3）。

11 立石氏館跡：西郷藤三郎幸朝とともに鎮西探題の使節となった立石孫三郎の館跡と思われる。『向彦次郎氏所蔵文書』観応二（正平六、1351）年十二月二十五日足利直冬所領充行状によれば、伊佐早庄内福田村十町は立石孫三郎跡とあり、「館屋敷」や「射場辻」、「城田」といった小字名が残る。

13 高城跡：元亀元年（1570）、西郷尚善によって築城されたとする。天正十五（1587）年西郷信尚が豊臣秀吉の九州征伐に参加しなかったため没収となった。その後龍造寺家晴に与えられたが、5代茂門の時に廃城。「四方に高櫓を構え、多数の矢狭間があり、（中略）東に大手口、本門、桜馬場があった」という記録が残る。朝鮮系中世瓦が採取され、土塁や空堀の痕跡をとどめている。

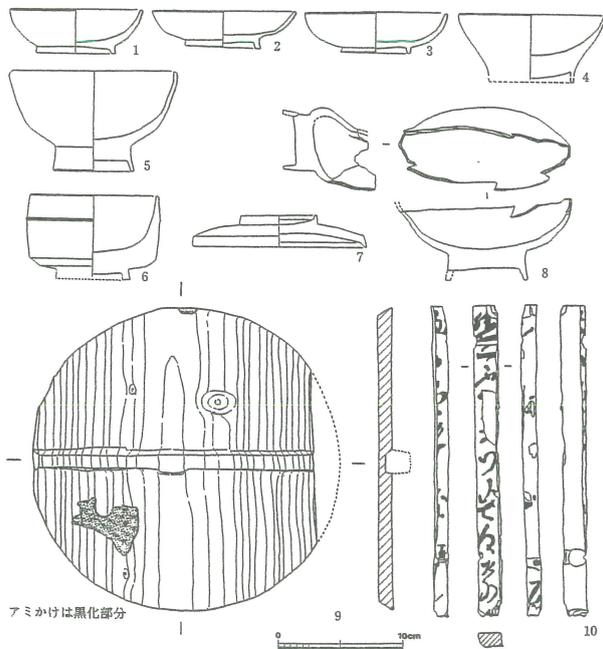
14 諫早家墓所：諫早家の菩提寺である天祐寺内にあり、初代～18代までの領主とその正・側室、子息、家臣、一族の墓や、雑塔、六地藏などがまとまってある。中でも4代茂真夫妻とその母堂の墓室は立派な石造御霊屋である。領主の墓碑を囲む石柵は、「弥勒四十九院」造りと呼ばれる形式で、弥勒仏が住するという兜率天の内院を現している。幕藩時代の領主の墓地形式をよく残している。県指定史跡。

15 上野町遺跡1127、1159地点（第4図）：船越町や上野町などを含む一帯は、古代、中世を通じて現在まで船越と呼称され、「船越駅」、「船越城」などが立地した場所である。『延喜式』などの記載から船越駅の所在地として想定されている。また南北朝期には北朝方の居城として機能した船越城が存在した。近傍には小字名として東・西上野馬場、大城戸（木戸）などが遺存している。平成20年度の調査では、土師器を埋納した土壇3基、掘立柱建物（12～13世紀）9棟、古墳時代住居跡、古墳時代及び中世期のミゾ4条、弥生式土器、土師器、滑石製品、輸入陶磁器などが出土している（注4）。



第4図 上野町遺跡1127,1159地点

16 田井原条里遺跡：昭和22年に米軍が撮影した航空写真に短冊状の条里地割が認められるが、昭和39年以降の大規模な土地改良事業などにより、地形は大きく改変されている。条里の成立年代を示す資料は乏しいが、平成9年の近隣の調査では8世紀後半の須恵器が出土しており、南側の丘陵上には古代の駅制に伴う「船越駅」想定地があり、田井原条里遺跡が駅田としての官給田であった可能性がある（注5）。



第5図 沖城跡

17 沖城跡（第5図）：中世、諫早を治めていた西郷氏が支城として築き、西郷氏に代わって諫早を治めた龍造寺家晴が隠居したと言われる。昭和39年以降の大規模な土地改良事業などにより、地形は大きく改変され、嶋と称する畑地は削平され、田圃として改良された。農道拡幅（平成7年度）及び市道拡幅（平成9・10・16）に伴う調査

では、中世～近世初頭の国産・輸入陶磁器が豊富に出土し、墨書木簡などの木製品や溝状遺構、鑄造関連土壌などが確認された。17世紀後半の遺物が出土していることから、「城」以外の目的で使用されていたと想定される（注6）。

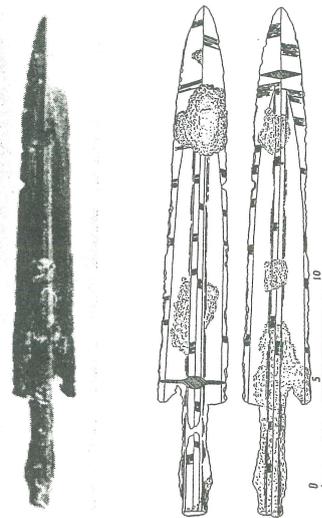
19 諫早農業高校遺跡（第6図）：明治39年の校舎建設時に32個の甕棺が出土したと伝えられ、このうちの一基から細型銅剣が出土したと報告されている（注7）。

20～22 小栗A～C地点遺跡（第7図）：弥生時代中期の甕棺墓、古墳時代の箱式石棺墓、中世の土壇墓などが確認されている。平成8年度の小栗C地点遺跡の調査では弥生時代中期中頃の丹塗りの筒形器台が出土している（注8）。

28 長野城跡：南北朝初期頃の築城とみられ、城主は宗像氏または長野氏と考えられる。郭・石垣が遺存。南北朝時代、長野氏が南朝方の勢力拠点となったため、応安三（文中三、1374）年、九州探題今川貞世によって攻略、在郷の家々まで焼き払われた。

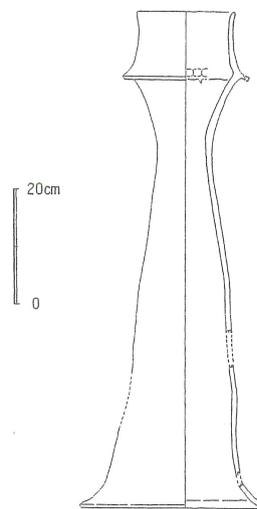
29 小野条里遺跡：「二ノ坪」、「三ノ坪」、「八ヶ坪」、「大坪」などの坪数詞名が残る。条里制施行の有無と時期の確定などを目的とし、昭和61年度からの3カ年で市教育委員会が実施した範囲確認調査では、しがらみ様遺構、溝状遺構、杭列が確認されている。諫早市埋蔵文化財調査協議会の調査では、縄文時代晩期から古墳時代前期までの遺物、遺構が出土（注9）。

30 小野宗方遺跡：縄文時代前期から中・近世の各時代にわたる遺構・遺物が包含された複合遺跡であり、縄文時代については前期の貝塚が確認された。また異なる色調の貝層が確認されることや、浮遊物の層位的確認から縄文時代の海進期の最高位点を確認するなど多くの成果



農高出土銅剣

第6図 諫早農業高校遺跡



第7図 小栗遺跡C地点出土筒形器台（橋本幸男氏原図）

が認められた。弥生時代については前期後半の土器・石器および土壙、稲作農耕に関連すると思われる板列や杭列が出土し、古墳時代は前期初頭の土器、中・近世の陶磁器が出土した（注10）。

31 小野堀口遺跡：平成16年度の調査で、杭列や溝・道路状遺構が確認され、国産・輸入陶磁器や土師器、木製品など縄文から近世までの遺物が出土した。確認された杭列及び道路状遺構は字図記載の水路及び道路状の痕跡とよく一致し、『宗像大社文書』「文永元年5月10日 関東裁許状案」にいう永野・宗方の中分線との関係を示唆する遺構の可能性はある（注11）。

34 井手遺跡：長野川左岸にあるゴルフ練習場の一部拡張工事の畑を掘削中、滑石製円筒1点、滑石製蓋2点（1点は円形で、もう1点は寄せ棟屋根形）が出土した。筒身は高さ30cmで、単なる円筒ではなく、中央がやや胴ふくらみがある。筒身の中心より少し上部に4個の縦型の造り出し鍰があり、形態は肥前地における滑石製経筒の出土例にはあまり見られない。青銅製の円筒式経筒を納入する外筒とも考えられるが、不詳である。南北朝時代の長野城麓の場所に作られており、他遺跡発見の経塚とは状況が若干異なっているように思われる。なお、築造者は宗像氏あるいは永野氏に関係する人物であろうと想定される。

注1 諫早市立諫早図書館蔵

注2 光富 博「高来郡小配分小豆崎村の人口構造」『諫早史談』第34号 2002

注3 諫早市教育委員会『中山遺跡』諫早市文化財調査概報 1992

注4 諫早市教育委員会『上野町遺跡1127、1159地点』諫早市文化財調査報告書 第23集 2009

注5 諫早市教育委員会『田井原条里遺跡』諫早市文化財調査概報 2008

注6 諫早市教育委員会『沖城跡』諫早市文化財調査報告書 第14集 2000

諫早市教育委員会『沖城跡Ⅱ』諫早市文化財調査報告書 第18集 2005

注7 正林護「諫早出土の銅剣」『九州考古学』第41～44号 1971

注8 長崎県教育委員会『小栗B遺跡』長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅷ 長崎県文化財調査報告書 第75集 1985

諫早市教育委員会『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書 第4集 1983

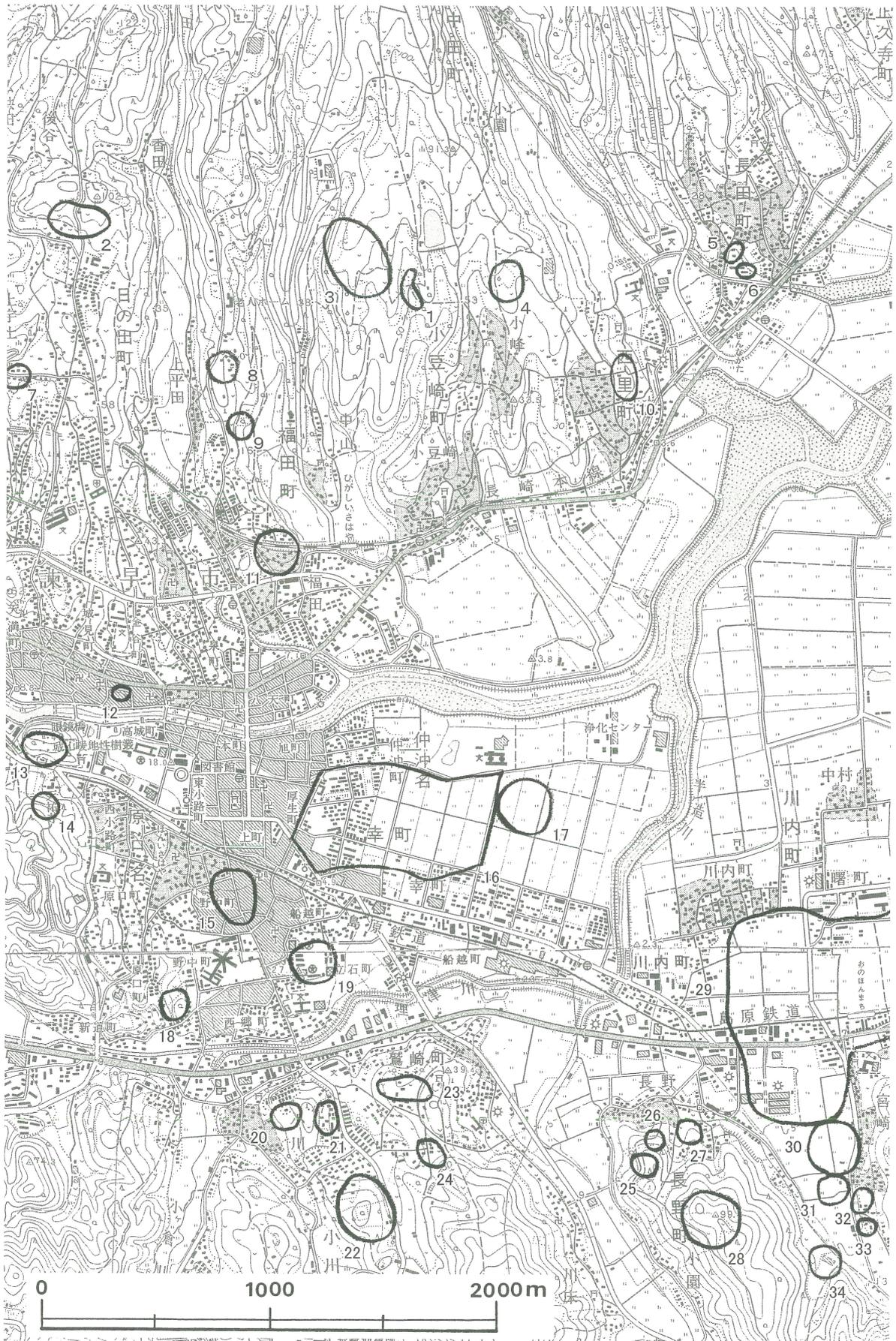
諫早市教育委員会『小栗遺跡C地点』諫早市文化財発掘調査報告書 第12集 1992

注9 諫早市教育委員会『宮崎館遺跡等範囲確認調査報告書』諫早市文化財調査報告書 第11集 1989

諫早市埋蔵文化財調査協議会『小野扇町遺跡』 1996

注10 諫早市教育委員会『小野宗方遺跡』諫早市文化財調査報告書 第13集 1994

注11 諫早市教育委員会『小野堀口遺跡』諫早市文化財調査報告書 第17集 2005



第8図 周辺遺跡図 (S-1/25,000)

番号	遺跡名称	所在地	立地	遺構・出土遺物等	時期
1	中前後谷遺跡	諫早市福田町、小豆崎町	丘陵		旧石器～縄文
2	上横址遺跡	諫早市日の出町	丘陵		弥生
3	中山遺跡	諫早市福田町、中田町	丘陵	黒曜石剥片	弥生
4	正津遺跡	諫早市小豆崎町	丘陵	サヌカイト片、土器片	弥生
5	東長田貝塚	諫早市長田町	台地	弥生土器	弥生
6	東長田遺跡	諫早市長田町	台地		中世～近世
7	折山頭遺跡	諫早市日の出町	丘陵		弥生
8	窪ノ谷遺跡	諫早市福田町	丘陵	黒曜石剥片	弥生
9	中山遺跡	諫早市福田町	丘陵	敷石遺構、集積遺構、石積遺構 瓦質土器、陶磁器など	中世～近世
10	西里遺跡	諫早市西里町	丘陵	縄文土器、弥生土器など	縄文・弥生
11	立石氏館跡	諫早市福田町	丘陵		中世
12	金谷遺跡	諫早市金谷町	平地	織部燈籠	中世～近世
13	高城跡	諫早市高城町	丘陵	本丸、空堀、土塁など	中世
14	諫早家墓所	諫早市西小路町			近世
15	上野町遺跡1127、 1159地点	諫早市上野町	平野	環濠、古墳時代住居跡、弥生土器 土師器、輸入陶磁器など	古墳・歴史
16	田井原条里遺跡	諫早市幸町	平野	須恵器	古代～近世
17	沖城跡	諫早市幸町	平野	陶磁器、木製品、溝状遺構など	中世～近世
18	甕山遺跡	諫早市原口町		窯跡（陶器の甕）	
19	諫早農業高校遺跡	諫早市船越町、立石町	平野	細型銅剣、弥生土器	弥生・古墳・中世
20	小栗A地点遺跡	諫早市小川町	丘陵	弥生土器片	弥生・古墳
21	小栗B地点遺跡	諫早市小川町	丘陵	墳墓	弥生
22	小栗C地点遺跡	諫早市小川町	丘陵	箱式石棺、碎片	弥生
23	十仙平遺跡	諫早市鷺崎町	丘陵	黒曜石剥片	縄文
24	源内谷遺跡	諫早市小川町	丘陵	黒曜石剥片・碎片など	縄文
25	崎田遺跡	諫早市長野町	丘陵	弥生土器、黒曜石剥片	弥生
26	尾野大久保遺跡	諫早市長野町	丘陵	黒曜石剥片・碎片	縄文
27	下組遺跡	諫早市長野町	丘陵		縄文
28	長野城跡	諫早市長野町	山頂		中世
29	小野条里遺跡	諫早市小野町、川内町 宗方町、長野町	平野	杭列、水路、弥生土器、土師器	旧石器～中世
30	宗方筒井遺跡	諫早市宗方町	平野	杭列、板列、縄文土器、弥生土器 陶磁器など	縄文・弥生
31	小野堀口遺跡	諫早市宗方町	平野	杭列、溝、陶磁器、土師器、木製品	中世・古代
32	水の手遺跡	諫早市宗方町	丘陵		古墳
33	太郎丸遺跡	諫早市宗方町	平野	弥生土器	弥生
34	井手遺跡	諫早市宗方町	丘陵	滑石製経筒	中世

第1表 周辺遺跡一覧表

Ⅱ 調査にいたる経緯と調査組織

1. 調査に至る経緯

小豆崎地区畑地帯総合整備事業施行予定地内の埋蔵文化財の取扱について県農村整備事務所からの照会があったのは、平成18年9月であった。

同事業施行予定地区内には中山遺跡及び正津遺跡の2遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として周知されており、その取扱については遺跡の範囲の確認と、遺跡の広がり の把握が緊要であった。

また施行予定地区内に他の遺跡の存在も予想されたため、併せて他の遺跡の存否確認調査をも実施する必要が認められたため、平成19年度諫早市教育委員会の範囲確認調査事業として実施する旨の協議を行った。

平成19年1月県央農村整備事務所、市農村建設課と今後の事業計画について協議を行い、平成19年度の試掘調査計画の大筋について協議を行った。

平成19年4月試掘調査及びこれに関する関係書類の整備、整備事業実施計画に関し協議を行った。

これに基づき試掘調査のための地元関係者との協議を7月29日に実施し、8月から試掘調査を実施し、翌年3月に終了した。

2. 調査組織

教 育 長	峰松 終止	(調査総括)
教 育 次 長	平古場 豊	
文 化 課 長	松本 玉記	
参事兼課長補佐	船岡 秀海	
文 化 課 参 事	秀島 貞康	(調査担当)
教育総務課主任	森永 蔵太	
調 査 指 導 員	古賀 力	
調 査 指 導 員	橋本 幸男	

第9図 範囲確認調査地点図 (S-1/5,000) (丸囲みの数字は第2表の番号に一致)



Ⅲ 範囲確認調査の記録

1. 調査の方法及び経過

範囲確認調査は、施行予定地区内に周知の遺跡である福田町の中山遺跡と小豆崎町の正津遺跡の2遺跡が入っていた。このため、2遺跡の範囲の確認と遺構の有無、またその時期の確定と、あわせて新規遺跡の確認を主目的に実施することとした。

このため範囲確認調査及び遺跡存否確認調査は約50haに及ぶ施工予定範囲の中から、周知の遺跡については、その属性を明らかにするため集中してトレンチ調査を行い、また新遺跡の確認については地形等を勘察してトレンチを任意に設定し、調査を行った。

トレンチの規模は建物遺構等の存在も考え合わせ、基本的に3×5mとした。

トレンチの設定数は全体で57筆88トレンチに及び、調査面積は1,228m²であった(第2表)。

設定したトレンチは表土部から精査し、遺構の確認がなされた場合は拡張する方法で行った(小豆崎町1,152M外)。

調査の記録は、トレンチ設定は平板測量を行い、S-1/100で記録し、また土層図は原則2面をS-1/10で実測した。

また遺物の出土が見られた場合は出土遺物ごとにドット・マップでS-1/20取り上げ、同時に出土レベルの記録を行った(福田町649-1外)。

写真の記録は、土層観察用畔断面は35mmリバーサル・フィルムで撮影し、遺構の記録は35mmモノクロ・フィルムを兼用して撮影した。

各トレンチに採用した基準標高は、諫早市大字小豆崎名上灰毛1,301番地の「基準点コードTR44930203501 四等三角点91.34mから移動を行い、計測した。

調査の経過については第2表に範囲確認調査トレンチ別一覧表を掲載する。

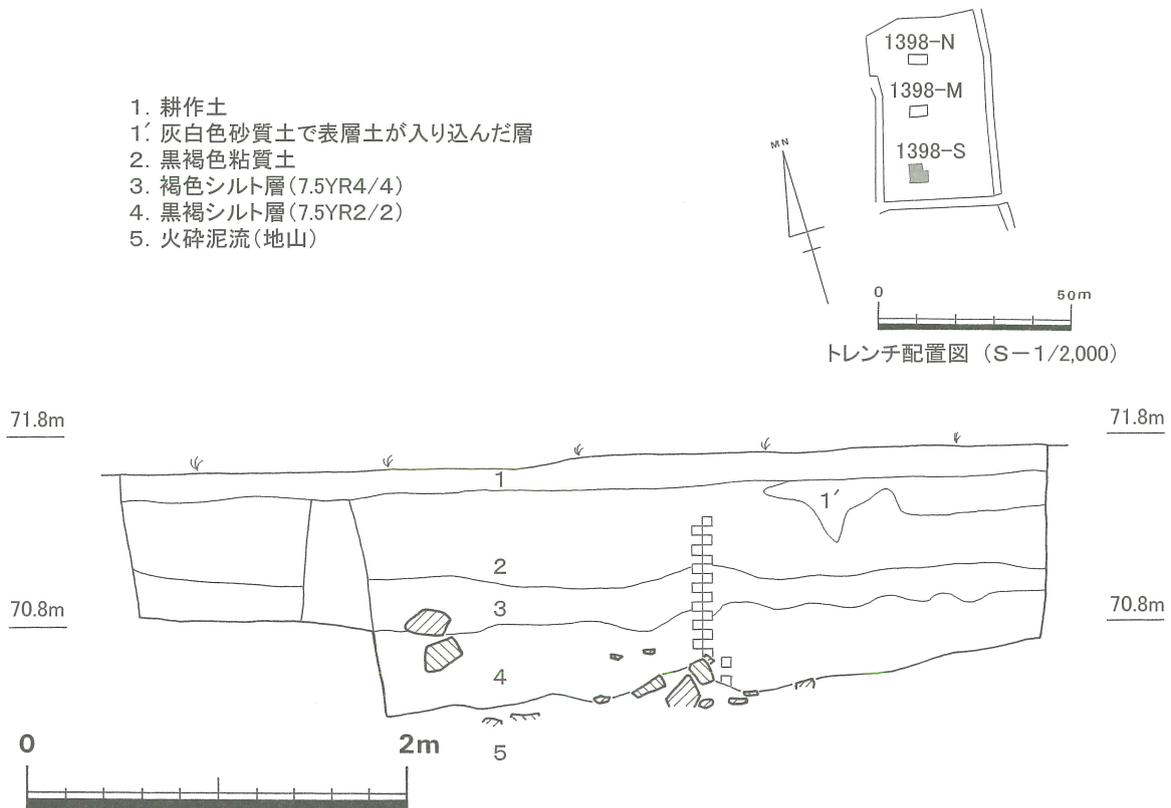
2. 土層と検出された遺構、遺物

ー 1. 土層 (第10図、図版5)

今次調査地点の土層の堆積は全体的に浅く、包含層も流失するなど良好な状態ではなかった。ただ、谷部や山林として残っている部分には、やや厚い土層の堆積を認めることができた。

第10図は小豆崎溜池東側に設定したトレンチの土層断面図である (小豆崎町1398番地Sトレンチ西壁)。2層は黒褐色粘質土で強く締まっている。3層は褐色シルト層、4層は黒褐色シルトで、基盤層の5層は火砕泥流層で安山岩の風化礫や土壌化した黄色土からなる。

3層、4層は起源不明の火山灰であるが、3層は約6300年ほど前に降下した鬼界アカホヤ降下火山灰 (K-Ah) の可能性があるものの、遺物の出土が見られなかった。

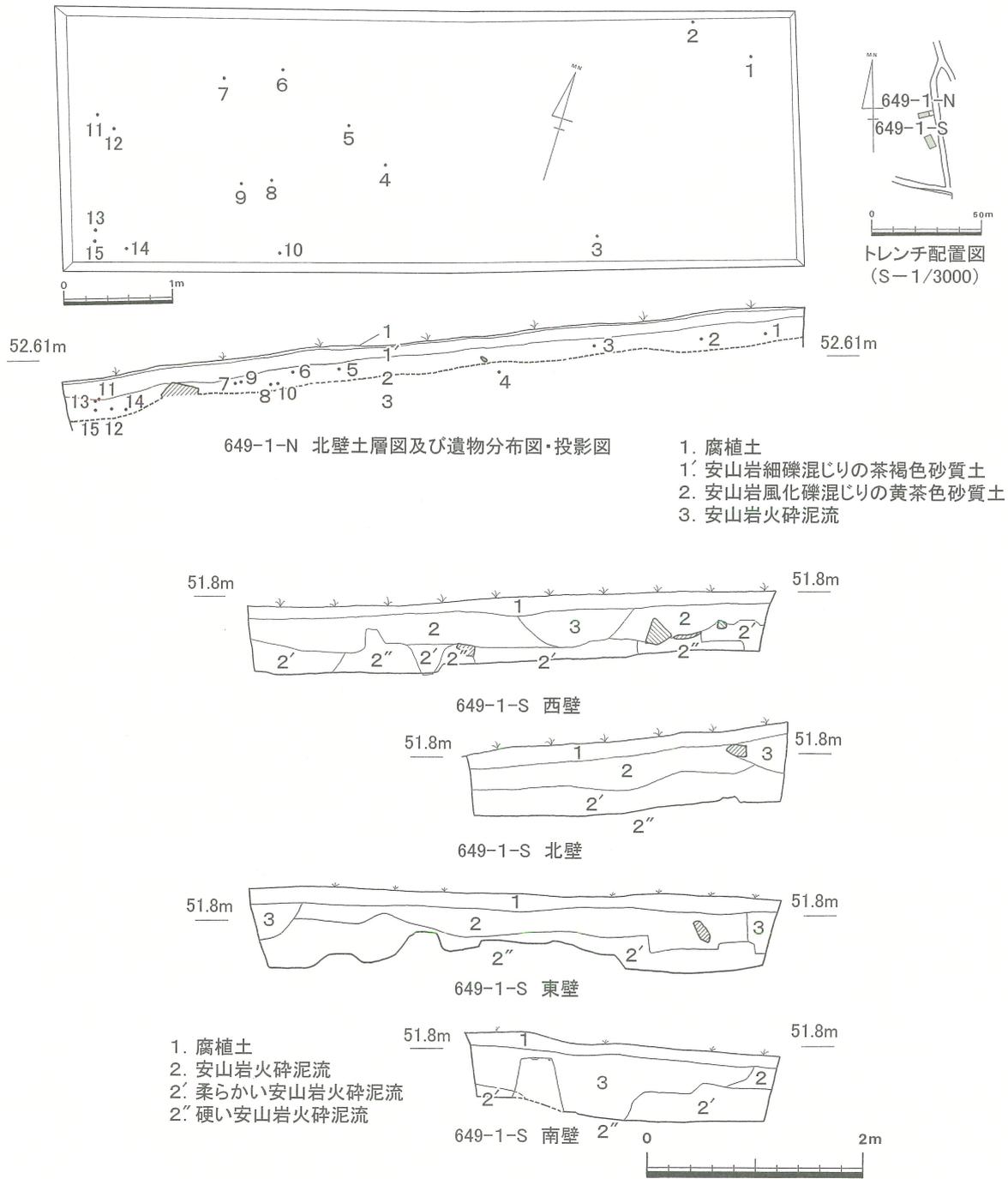


ー 2. 検出された遺構

調査によって検出された遺構について町別、地番別に記述する。

① 福田町649-1 番地 (第11図、図版5・6)

施行予定地の南端部に位置し、現況は山林である。丘陵の中央を里道が南北走している。遺跡はこの里道の東西に展開する可能性があったが、整備事業の施行予定地が西側半分であったため、西側の平坦部分に2箇所の特レンチを設定した。北側をNトレンチ、南側をSトレンチとした。



第11図 福田町649-1 番地遺物出土平面図・投影図・土層図 (S-1/60)

第11図はNトレンチの土層図で、第1層は表層土で最上層に腐植土を含み、下位に茶褐色の安山岩細礫を含む砂質土である。2層は安山岩風化礫混じりの黄茶色砂質土である。3層は安山岩火砕泥流層で基盤層となっている。

遺物は2層中に含まれSトレンチにおいては縄文時代晩期前半の貝殻条痕文土器、後半の突帯文土器が検出され、またNトレンチからも同時期の遺物が検出された。

Nトレンチにおいてドット・マップで取り上げた遺物は15点で、土器・陶器各1点のほかは石器である。石器の中には表面がかなり風化した資料が見られ、旧石器時代からの遺物を包含していると見られた。またトロトロ石器が出土しており、風観岳支石墓群（注）と同時期の縄文時代晩期後半の突帯文期の遺跡が存在する蓋然性が極めて高いことを窺わせた。遺物を包含する層は黄土色のパミスである。

遺物包含層の標高はSトレンチで51.3～51.6m、Nトレンチで52.8～53m前後を測る。

（注）諫早市教育委員会 『風観岳支石墓群発掘調査報告書』 2006

No.	機 種	材 質	標高(m)	No.	機 種	材 質	標高(m)
1	石鏃	黒曜石	52.779	9	削片	黒曜石	52.332
2	削片	黒曜石	52.759	10	剥片	安山岩	52.353
3	剥片	安山岩	52.681	11	剥片		52.234
4	削片	黒曜石	52.476	12	削片	黒曜石	52.151
5	削片	黒曜石	52.479	13	削片	黒曜石	52.22
6	トロトロ石器	黒曜石	52.444	14	削片	黒曜石	52.151
7	陶器		52.329	15	晩期土器		52.144
8	削片	黒曜石	52.339				

第3表 福田町649-1-Nトレンチ出土遺物一覧

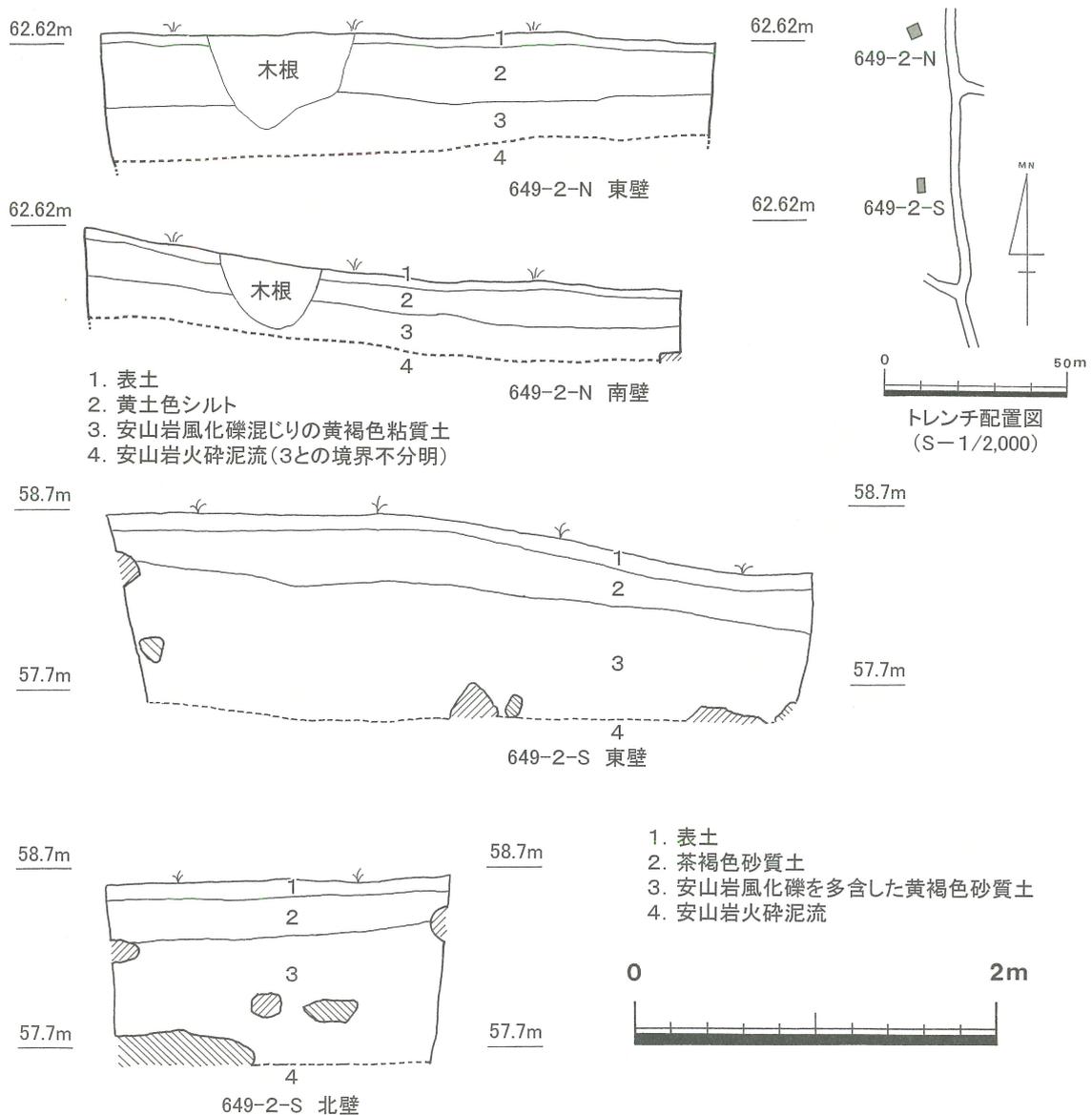
②福田町649-2番地（第12図、図版6）

福田町649-1の北に隣接する。調査前は山林であった。南北に細長い丘陵の稜線部には南北走る里道があり、この道の掘削で包含層は大きく削られている。約40mの間隔を置いて2箇所設定した。

第12図はS、Nトレンチの土層図である。第1層は表層土で、第2層は茶褐色砂質土である。第3層は5~20cm代の安山岩風化礫を多含しており、砂質を示す。第4層は安山岩火砕泥流層である。

遺物は第2層に包含されている。一部縄文晩期土器が第3層から検出されたが、木根等に伴う落ち込みと想定された。Nトレンチからは黒曜石の台形石器素材の折り取り素材の残滓剥片が出土している。遺物を包含する層は黄土色のパミスである。

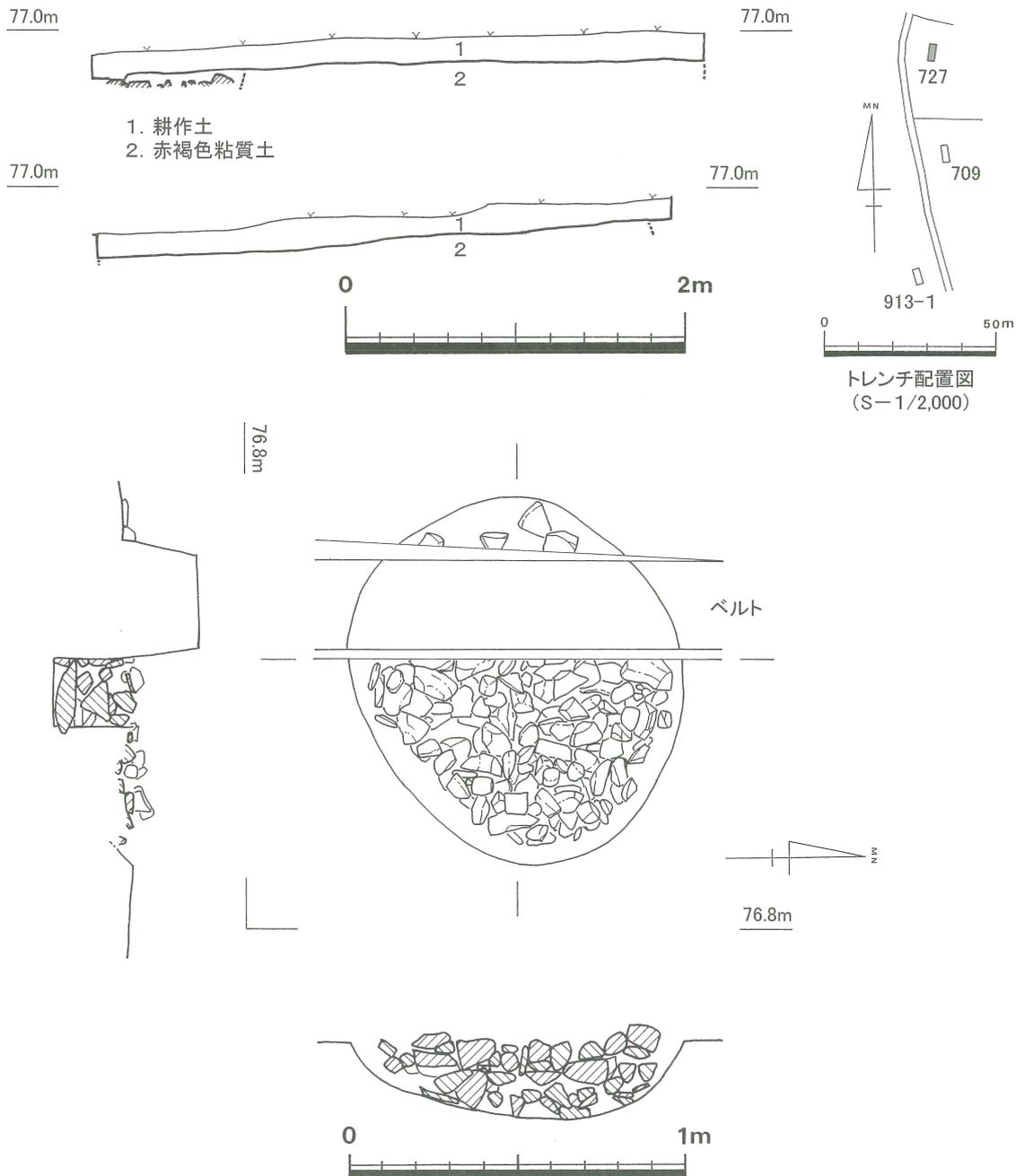
遺物包含層の標高はSトレンチで58~58.6m、Nトレンチで63.2~63.6m前後を測る。



第12図 福田町649-2番地土層図 (S-1/40)

③福田町727番地（第13図、図版7・8）

表土直下において安山岩火砕泥流に掘り込んだ集石土壙を検出した。直径1mの円形状を呈し、深さは現存で20cmを測る。床面はやや平らな皿状である。この土壙のなかに拳大～小児人頭大の垂角礫が隙間なく充填されており、また中には1個だけ川原礫が含まれていた。礫間をうめる充填土は茶褐色系の土で、周辺の土が流れ込んだことを示している。この充填土の中には遺物や炭化物などは見られず、また礫の赤変も認めなかった。このため所属時期や用途の確認が困難であった。また周辺から関連遺構の確認もなされなかった。形状などから最も関連すると思われるものに、鷹野遺跡A地点（注）で確認された集石遺構がある。16基確認されてお



第13図 福田町727番地土層図・遺構実測図（S-1/20、1/40）

り多くが礫の赤変や壁の焼けが認められるものの、中には8号や9号などのように炭化物や礫の赤変が全く認められない例もあり、本遺跡出土の集石遺構と似通う例が存在している。

遺構検出面の標高は76.7m前後である。

(注) 長崎県教育委員会 「諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 Ⅲ」

1986

④福田町744番地 (第14図、図版9)

表土直下において安山岩火砕泥流に掘り込んだピット33基、L字に曲がるミゾ状遺構、焼土を含む不定形掘り込みを確認した。耕作によってかなりの程度削平されており、ピット・ミゾで10cm前後、土壙で20cm前後の深さの残りであり、保存状態が極めて悪い。

ピットの覆土は、色調等の相違から3種類ほどのものが見られ、時期の違いを示しているものと思われる。

ピットの多くには炭化物片や焼土塊を含んでおり、また覆土が褐色から黒褐色と調査時の堆積土に見られない土色・相を呈しており、往時のものと想定されるものの時期の特定等が困難である。

浅い落ち込みのほぼ中央部に平面形状が略方形で辺長80cm前後、深さ20cmほどの土壙状の遺構がある。覆土は褐色土で、炭化物や焼土塊が混じっている。近時の安山岩火砕泥流が土壌化したものではないことは、層中に風化礫を含んでいないことから明らかである。

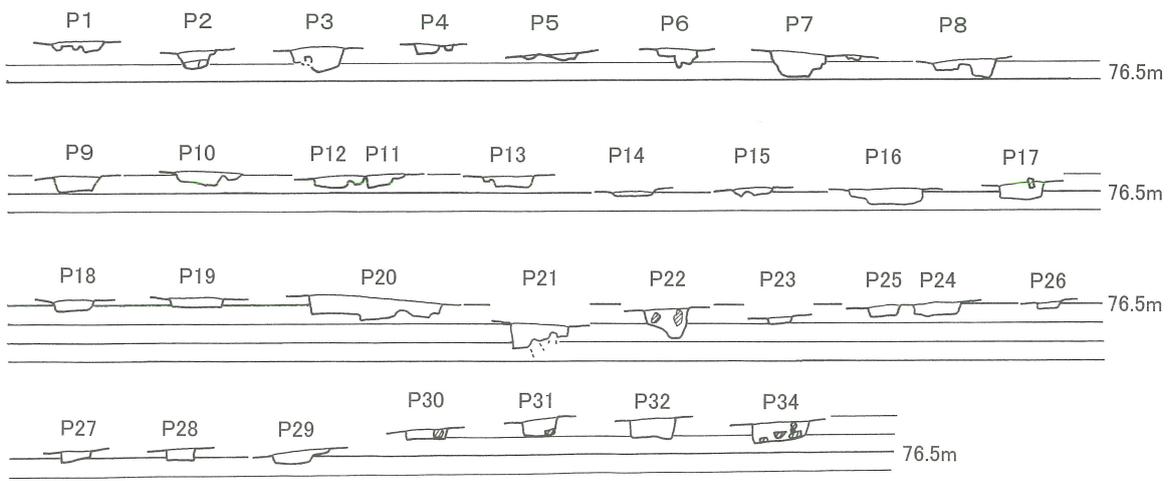
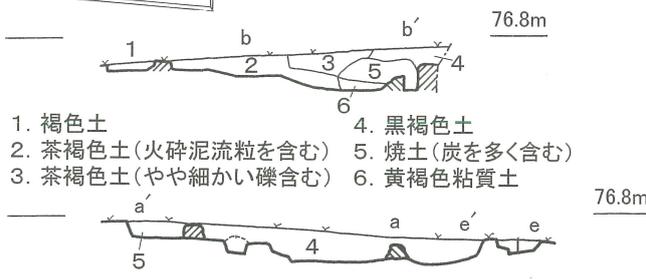
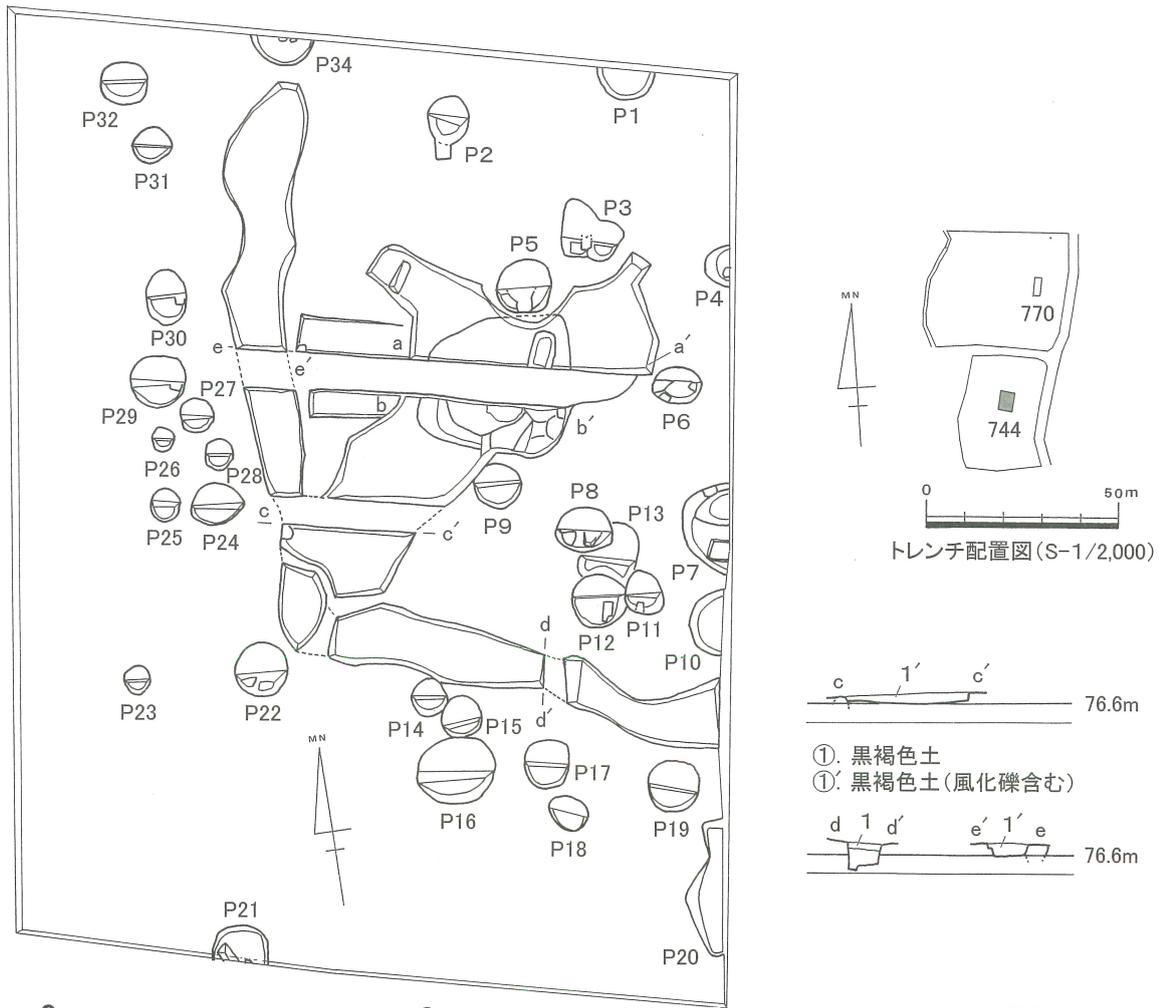
だが、遺構からの遺物の出土がなく時期不確定である。

ピットや土壙を含めて遺構からの遺物の出土は、ピット4から近世以降の磁器細片が1点検出されたのみである。よって遺構全体の時期の確定は困難としなければならない。焼土を含む土坑の存在と、周囲のピット、L字に曲がるミゾの状態から住居跡の可能性が極めて高いと見られる。

検出遺構の属性は第4表のとおりである。

No.	遺構	覆土	直径・幅	深さ
1	ピット1	茶褐色土	31	10
2	ピット2	黒褐色土+茶褐色土	22	10
3	ピット3	黒褐色土	15	10
4	ピット4	褐色土	22	6
5	ピット5	黒褐色土	29	4
6	ピット6	黒褐色土	25	9
7	ピット7	褐色粘質土	50	12
8	ピット8	褐色土+炭化物+焼土	30	10
9	ピット9	黒褐色土	25	8
10	ピット10	褐色土	36	8
11	ピット11	黒褐色土	20	6
12	ピット12	黒褐色土	29	5
13	ピット13	黒褐色土+焼土	30	6
14	ピット14	黒褐色土	19	3
15	ピット15	黒褐色土+炭化物	21	4
16	ピット16	黒褐色土	42	9
17	ピット17	黒褐色土	24	8
18	ピット18	黒褐色土+炭化物+磁器片	21	5
19	ピット19	褐色土	27	5
20	ピット20	褐色粘質土	73	10
21	ピット21	赤褐色粘質土	29	13
22	ピット22	黒褐色土+焼土	27	15
23	ピット23	褐色土	15	3
24	ピット24	黒褐色土+焼土+炭化物	27	6
25	ピット25	黒褐色土+焼土+炭化物	15	6
26	ピット26	黒褐色土+焼土	11	5
27	ピット27	黒褐色土+炭化物	17	6
28	ピット28	黒褐色土+焼土+炭化物	15	5
29	ピット29	黒褐色土	29	5
30	ピット30	黒褐色土	21	5
31	ピット31	黒褐色土+炭化物	22	9
32	ピット32	黒褐色土	25	10
33	ピット33	欠番		
34	ピット34	黒褐色土+焼土	33	10
35	土 壙 1	褐色土+炭化物+焼土	75*74	10~20
36	ミゾ 1	黒褐色土	23~37	10
37	ミゾ 2	黒褐色土	24~31	3

第4表 福田町744番地遺構一覧(単位:cm)



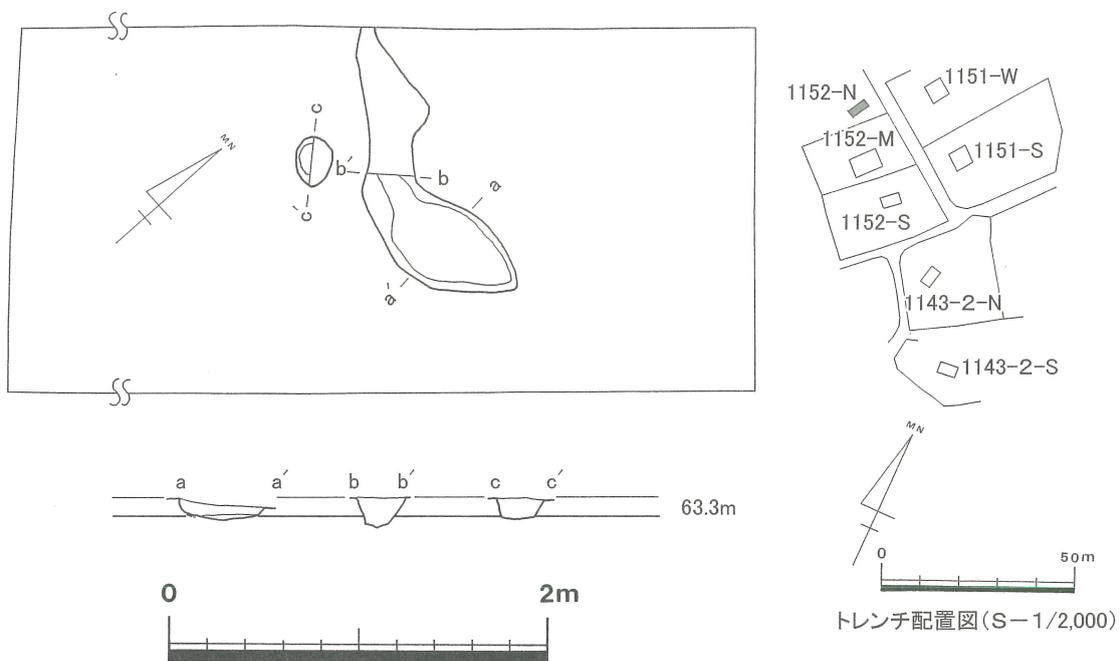
第14図 福田町744番地土層図・遺構実測図 (S-1/40)

⑤小豆崎町1152番地（第15・16図、図版10）

この地番周辺が周知の遺跡として知られている「正津遺跡」である。かつては石斧や石鏃などの遺物が多く見られたという。

トレンチは東南方に開ける畑に3箇所設定した（N・M・Sトレンチ）。

Nトレンチにおいてミゾ状遺構1基、ピット1基を確認した。ミゾ状遺構は幅45cm、深さ5cm、検出長1.5mほどである。ミゾ底面は不陸状である。覆土は灰茶色粘質土で安山岩の風化礫を含んでいる。またピットは径25cmほどの円形状で、深さは10cmと浅い。覆土はチョコレート色である。いずれも残存状態が極めて悪く、また遺物の出土も見られず時期・機能の確定が不可能であった。

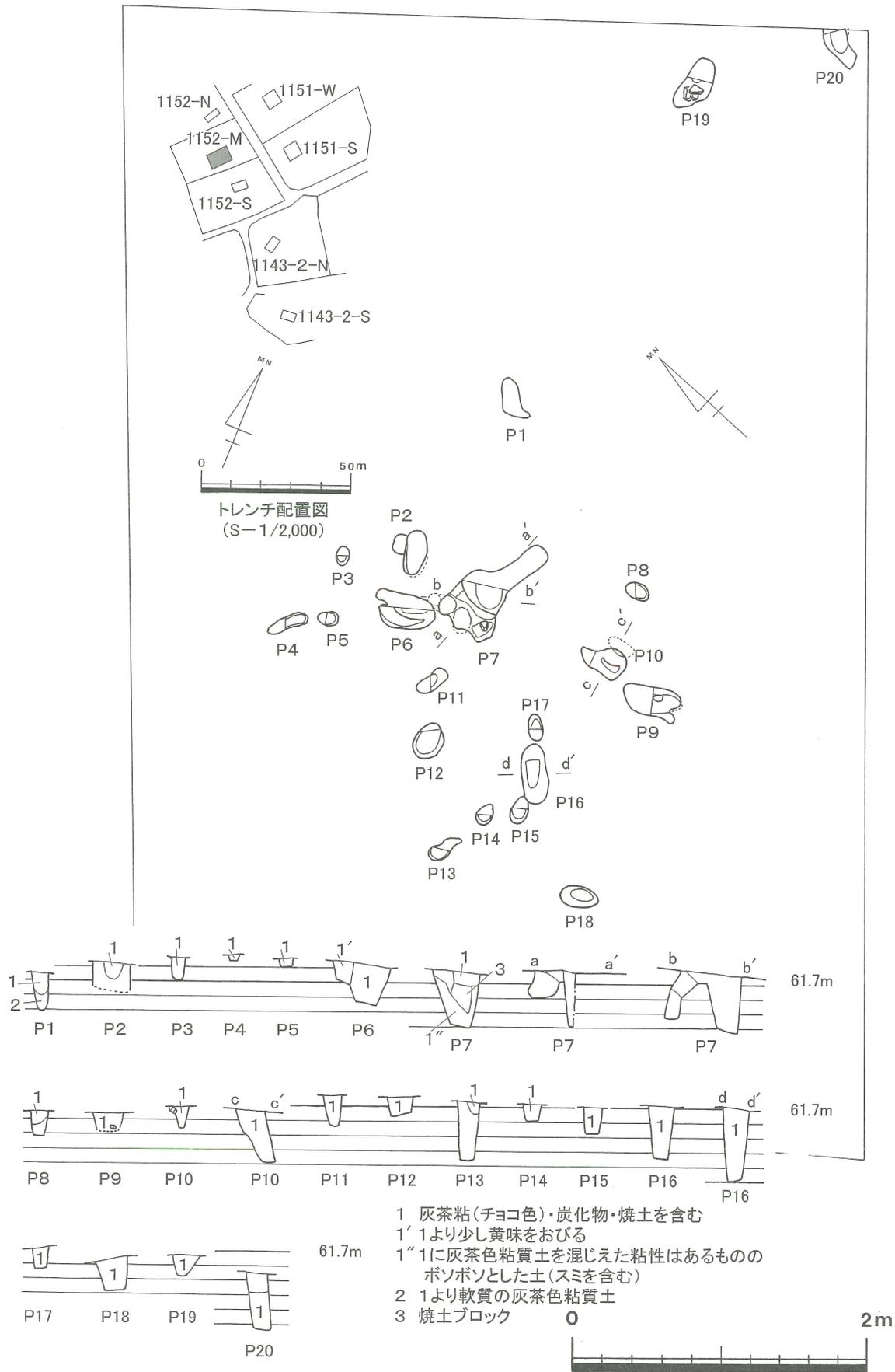


第15図 小豆崎町1152番地Nトレンチ、ミゾ実測図（S-1/40）

Mトレンチにおいては、ピット20基を確認した。3m弱に集中する傾向が見られ、周壁は削平されており存在しないが、住居跡の可能性が高い。

特にピット7は焼土を多量に含んでおり、炉跡の可能性が大きい。ピットは多くが楕円形状を示しており、住居跡とすれば、柱材の単なる立ち腐れとは考えにくく、抜き取り痕跡とも思われる。

所属時期の確定については遺物の出土が見られないため不詳である。ピット覆土は炭化物や焼土を含む灰茶色粘土で統一され、同一時期の所産であることを示している。



第16図 小豆崎町1152番地Mトレンチ遺構実測図 (S-1/40)

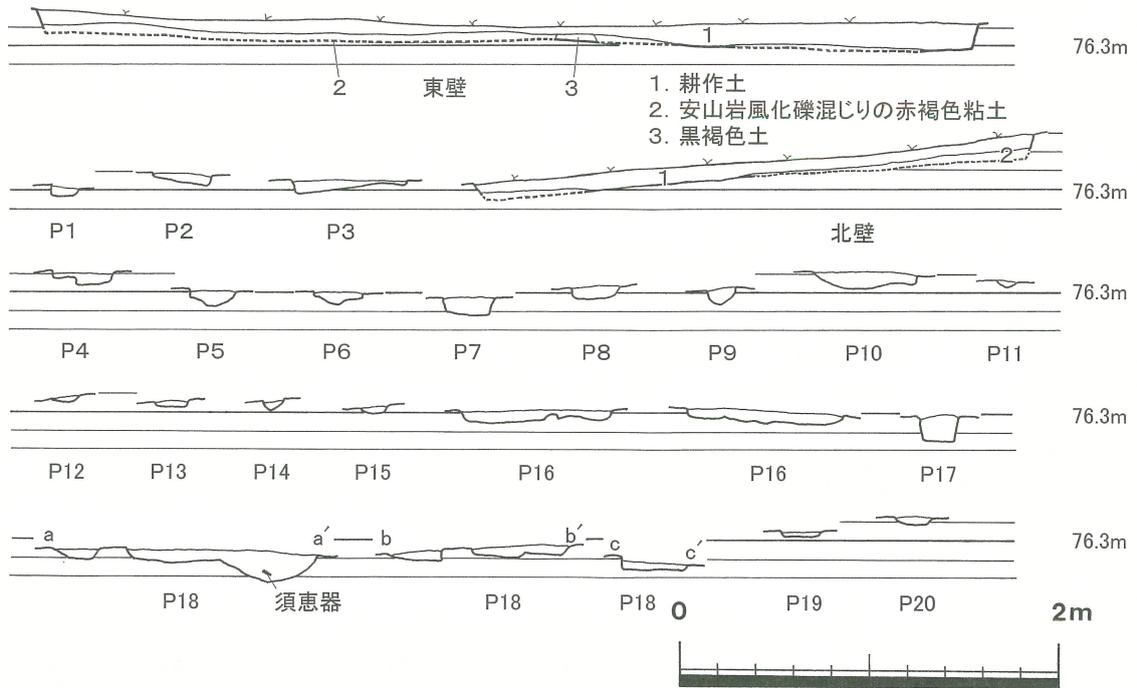
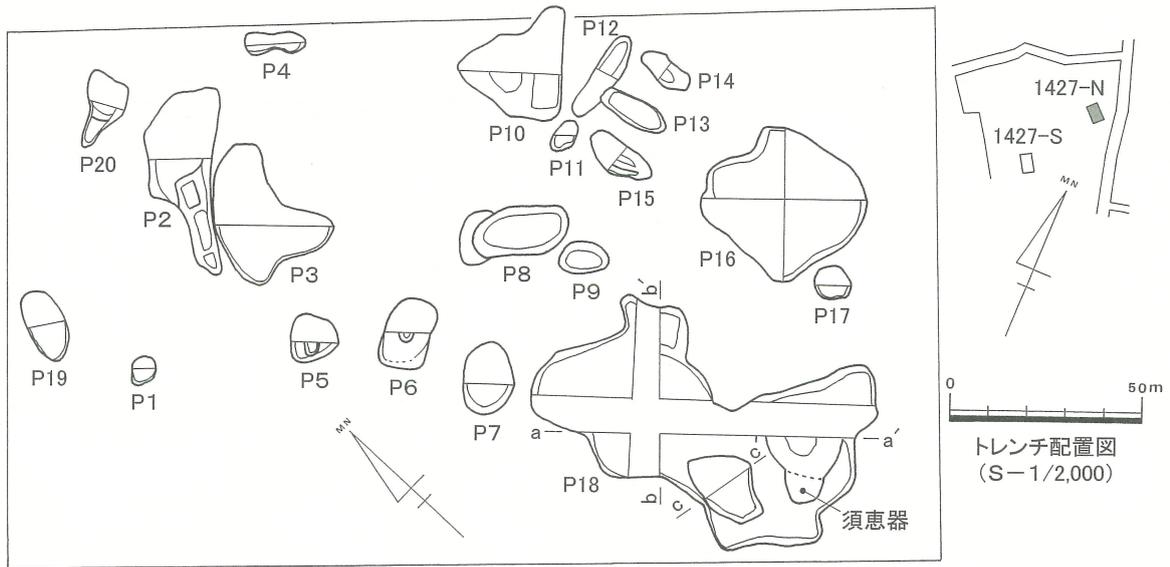
No.	覆 土	直径	深さ	備考	No.	覆 土	直径	深さ	備考
1	灰茶粘+炭化物+焼土	11	26		11	灰茶粘+炭化物+焼土	23×11	22	
2	灰茶粘+炭化物+焼土	23	11		12	灰茶粘+炭化物+焼土	26×20	14	
3	灰茶粘+炭化物+焼土	8	15		13	灰茶粘+炭化物+焼土	26×11	40	
4	灰茶粘+炭化物+焼土	29×7	4		14	灰茶粘+炭化物+焼土	16×11	12	
5	灰茶粘+炭化物+焼土	15×9	5		15	灰茶粘+炭化物+焼土	20×12	19	
6	灰茶粘+炭化物+焼土	40×25	27	2段掘り	16	灰茶粘+炭化物+焼土	42×18	38	
7	灰茶粘+炭化物+焼土	80×40	38		17	灰茶粘+炭化物+焼土	19×11	14	
8	灰茶粘+炭化物+焼土	18×11	17		18	灰茶粘+炭化物+焼土	27×15	22	
9	灰茶粘+炭化物+焼土	41×20	13		19	灰茶粘+炭化物+焼土	40×20	15	
10	灰茶粘+炭化物+焼土	32×20	15	2段掘り	20	灰茶粘+炭化物+焼土	30+ α ×17	38	

第5表 小豆崎町1152番地・Mトレンチピット一覧（単位：cm）

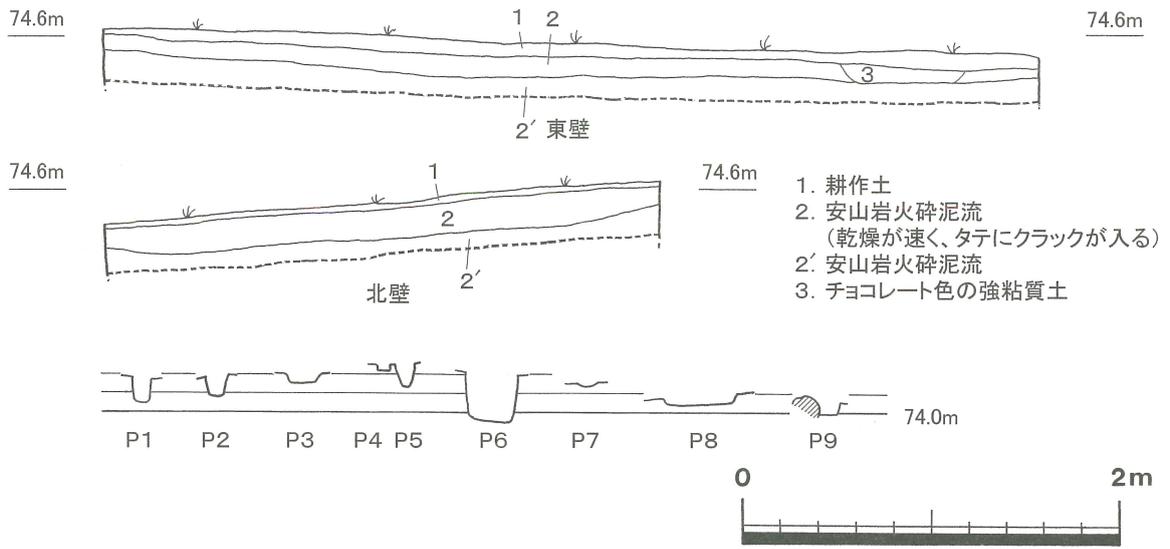
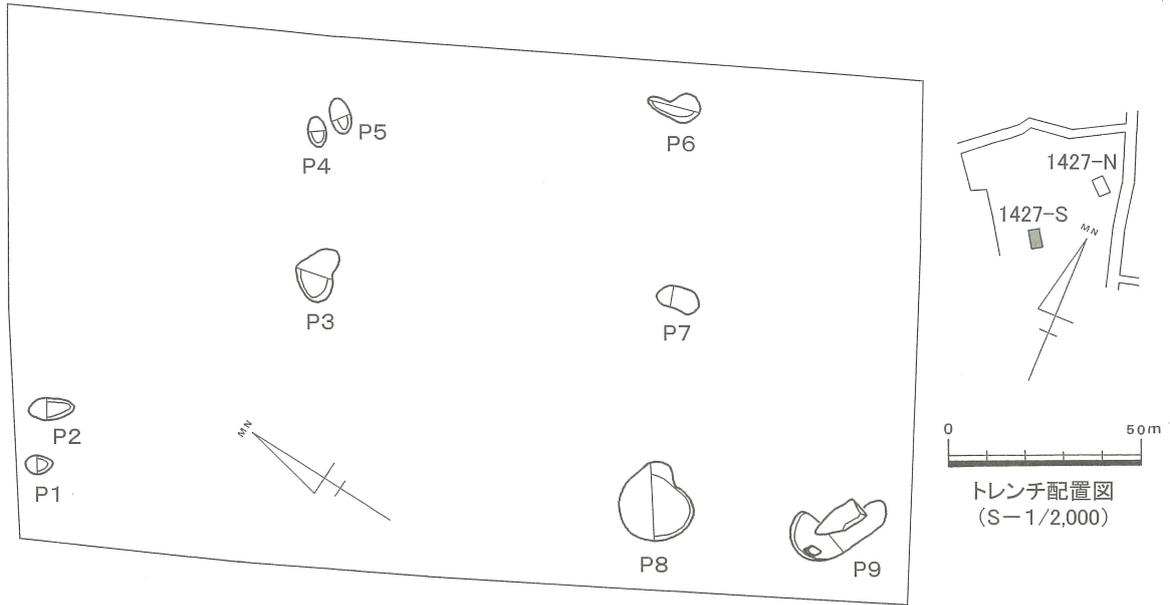
⑥小豆崎町1427番地（第17・18図、図版11・12）

Nトレンチにおいて表土直下で不定形土壙とピット20基を確認した。遺物包含層及び遺構上面をかなりの程度削平されており、遺構の残りは極めて悪く約5cm程である。覆土はいずれも黒褐色土で同一時期の所産であろう。不定形土壙から須恵器甕片が出土しており、6～7世紀代の所産と思われる。須恵器は外面細かな長方形叩き、内面青海波叩き文を有するものである。他の遺構からの遺物の出土はなかった。

また、Sトレンチにおいてもピット9基を検出したが、Nトレンチ同様かなり削平を受けており、ピットの時期、性格などを示唆する資料は確認できなかった。



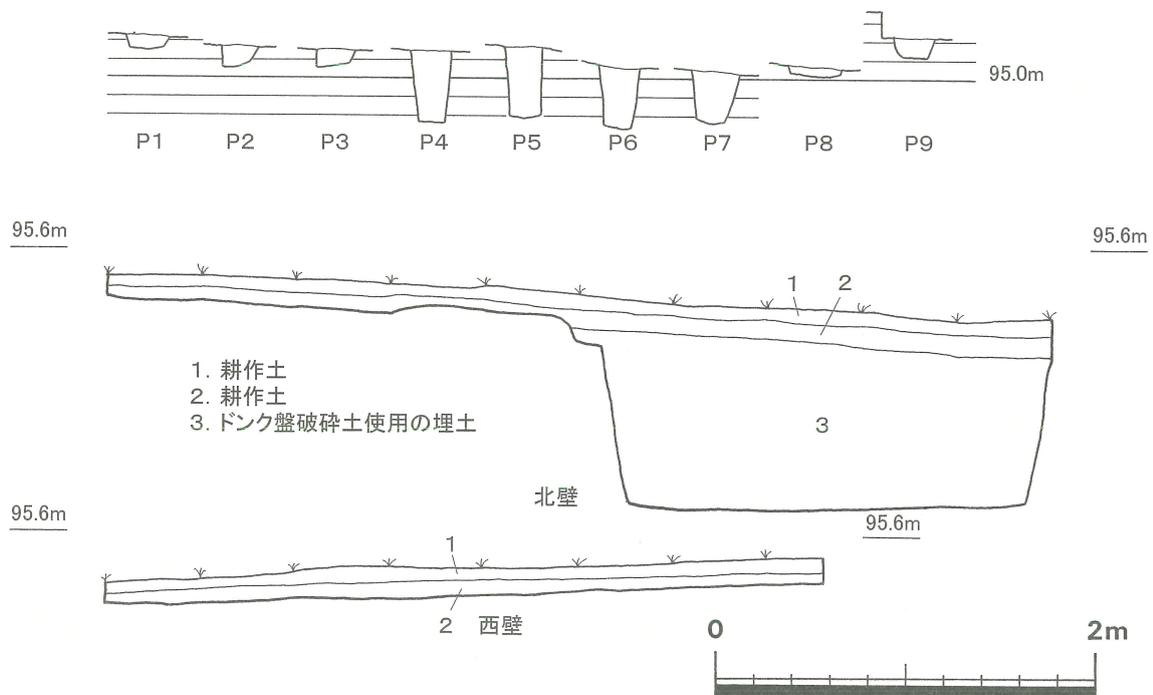
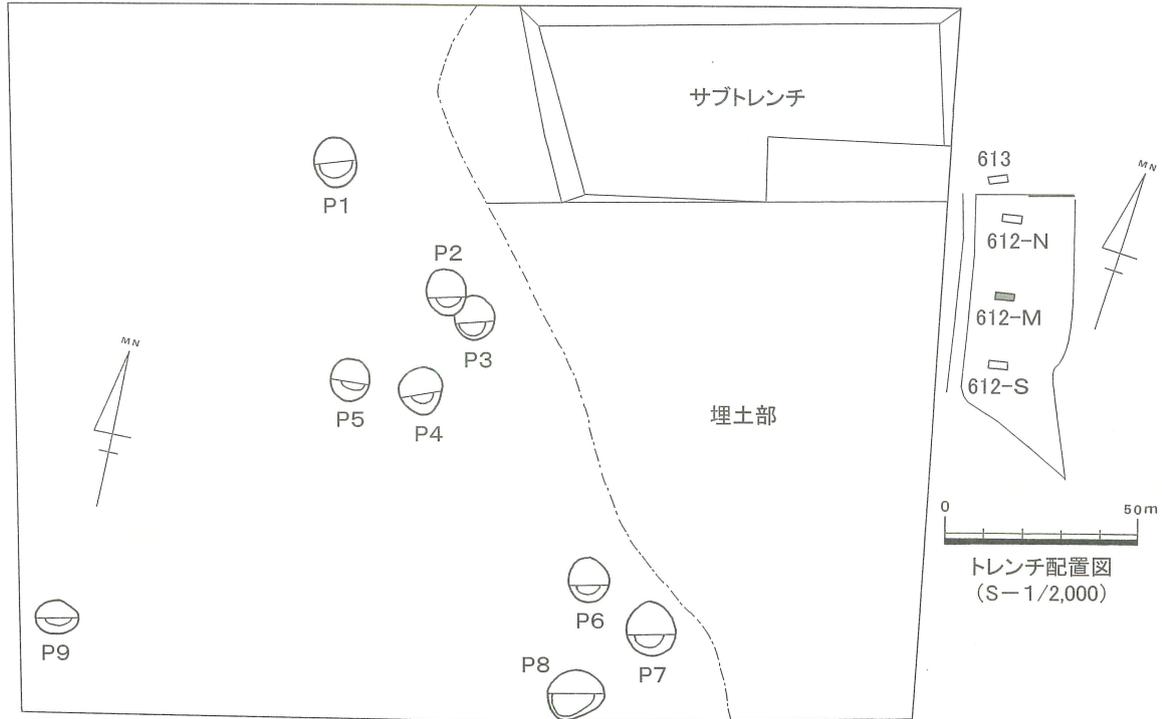
第17図 小豆崎町1427番地Nトレンチ土層図・遺構実測図 (S-1/40)



第18図 小豆崎町1427番地Sトレンチ土層図・遺構実測図 (S-1/40)

⑦中田町612番地（第19図、図版12）

表土直下においてピット9基を検出した。ピットはいずれも20cm内外の円形状を示しており、覆土は褐色土を主体に灰黒色、黄色を混じり、炭化物や焼土を含むものもある。これらのピット覆土と同じ層は、土層断面に見られないことから、古くに流失したものである。なお、ピットからの遺物の出土がなく時期不詳である。



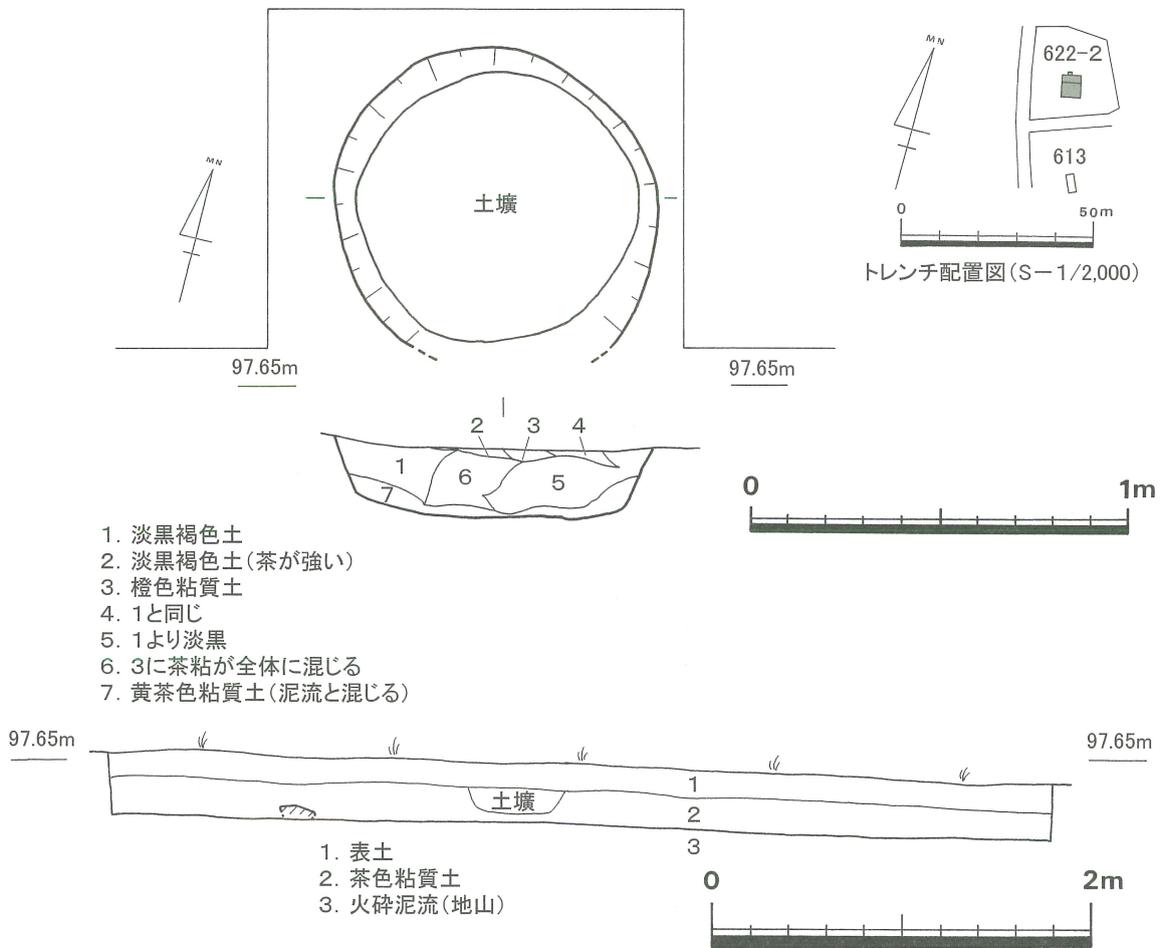
第19図 中田町612番地Mトレンチ土層図・遺構実測図（S-1/40）

⑧中田町622-2番地（第20図、図版13）

表土直下において褐色土に掘り込んだ土坑を1基確認した。土坑は直径1m弱の円形状で深さは15cm程である。土坑内から遺物の出土が見られず時期・性格不詳であるが、類例として市内小川町の林の辻遺跡1・2号円形土坑墓（注）を挙げる事ができる。

遺構検出面は標高97.65mである。

（注） 諫早市教育委員会 『林ノ辻遺跡』 1983



第20図 中田町622-2番地土層図・遺構実測図 (S-1/20、1/40)

－ 3. 検出された遺物（第21図、図版16）

今次調査によって検出された遺物は、調査面積に比し極めて少量であり、包含層の流失・欠如がその主たる原因である。遺物については、ミカンコンテナ1箱分ほどであった。設定したトレンチ出土の遺物は、近世元禄期以降のものが多く、トレンチ検出の遺構に伴うものは殆ど検出していない。

1は黒曜石製剥片で上半部・打瘤部を除去している。石質は漆黒で透明感のある良質の黒曜石を素材としており、輝度は低く風化度が高い。単設打面の石核から剥取されたやや横広で肉厚の縦長剥片である。背面には中央部に加撃によるフィンジーを起こしながら剥離された凹凸の連続した痕跡を認める。端面は原礫面を残している。打瘤部を残す上半部は台形石器の素材として利用されたと思われ、上端面に主要剥離面側からの折り取った加圧痕を残している。福田町649－2、北トレンチ表土から出土した。

2は1と同様の黒曜石剥片で打瘤部を残し、中ほどから先端部を腹面からの加圧で折り取っている。両極に打面を有する石核から剥取されており、右面の剥離面に痕跡を残している。打面は未調整で、原礫面を残している。良質の黒曜石であるが、輝度が低く、風化度が高い。台形石器の素材となり得る肉厚の剥片である。小豆崎町1398、中央のトレンチから出土した。

3は黒曜石製の削器である。身幅のやや広い剥片を素材としており、両縁に主要剥離面側から細調整を施して刃部を作出している。単設打面の石核から剥取され、6枚ほどの剥離面を残している。この剥片が剥取される最終段階の剥離はステップ気味に収束しており、寸詰まりの剥片しか剥離できなかつたようである。打面は狭小な調整打面を残している。小豆崎町1151西トレンチから出土した。

4は黒曜石製の縦長剥片で、鈴桶タイプのものである。打面はほとんど残さず狭小である。単設打面石核から剥取されており、初期段階のものである。背面には大きく原礫面を残している。主要剥離面左縁に微細な使用痕跡を残している。福田町649－1、南トレンチ表層土からの出土である。

5はトロトロ石器で、良質の黒曜石を素材としている。b面が主要剥離面で周縁から丁寧な細調整・平坦剥離を施して整形している。背面では右端に一次剥離面を残すほかは、やや湾曲する刃部方から調整され、うち1枚の槌状の剥離面は主要剥離端面に及んでいる。同様の資料は風観岳支石墓群（注）の調査で確認されており、縄文時代晩期後半の突帯文期に属するものであろう。福田町649－1、北トレンチのドット取り上げNa6資料である。

6は白色を呈する黒曜石剥片を素材にした石鏃である。一次剥離面を残さないように丁寧に平坦剥離を施し、体幹中位まで及んでいる。脚端は浅い「ハ」字状で、端部はやや丸く収めている。先端部をわずかに欠損している。挟り部は丸く、深い。風観岳支石墓群石鏃分類1E類である。小豆崎町1398Sトレンチ出土である。

7は灰色黒曜石を用いている。体幹はやや外湾気味に調整され、周縁からの平坦剥離は中ほどまで及んでいる。脚端は浅い「ハ」字状に成形され、端部はやや丸めに仕上げられている。

抉り部は丸く、深い。風観岳支石墓群石鏃分類の2E類である。小豆崎町1257-1、西トレンチの出土である。

8は薄灰茶色の黒曜石製の石鏃で風観岳支石墓群石鏃分類の2D類である。a面が主要剥離面で中央部にわずかに素材面を残している。b面先端部から槌状の剥離痕が見られ、使用の痕跡を留めている。片脚を欠損している。小豆崎1206-1表層土の出土である。

9は刻み目突帯文土器口縁部と思われる資料であるが、類例を知らない。口唇部は1cm間隔に指頭で凹ませ、間の頂部に細い工具で刻みを圧痕している。さらに口縁下1cmまでの間に3mmほどの凹線を横走させている。内外面ともに荒れていて調整手法が不明であるが、右側の刻み目圧痕内に僅かに炭化物を認める。胎土は石英、角閃石などの微細な鉱物を混入させており、当地以外からの搬入品であることを窺わせている。色調は内外面ともに灰黒色を呈し、焼成は良好である。縄文時代晩期後半の突帯文期に属するものであろう。福田町649-1、南トレンチの表土出土。

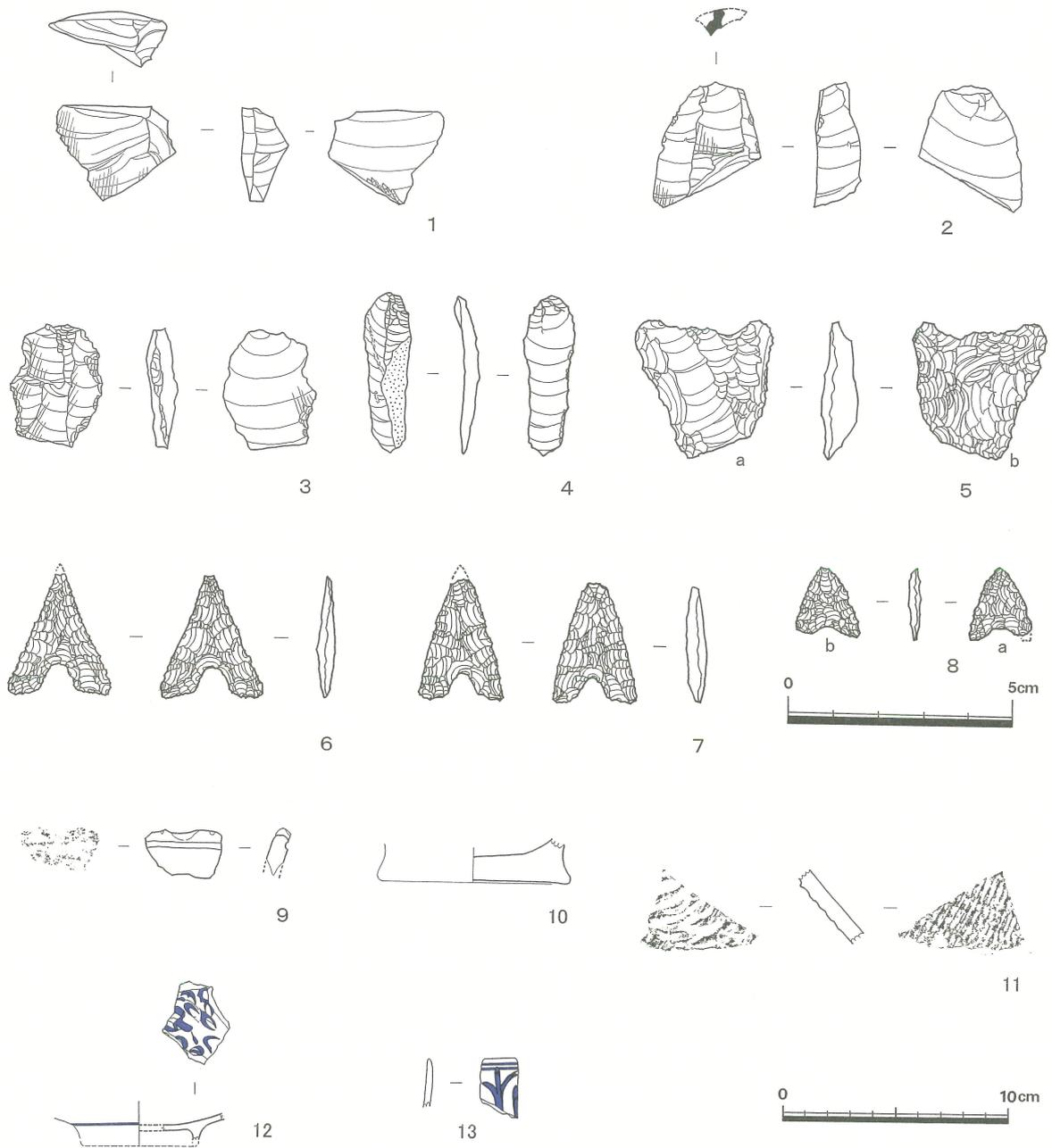
10は甕型土器底部資料で1/2ほどを残している。やや上げ底気味の底面から裾広がりの底部を作り、やや窄まって体部へと接続する。底部内外面ともにナデ調整と思われるが、外面は荒れていて不分明である。外底面には21×12mmほどの豆類(?)の圧痕を認め、また内底面には胎土中に混在した穀類(?)の炭化物やコゲと思われる黒色面を小範囲で認めることができる。底径94mmを測る。色調は底面～外面は赤褐色、内面は黒～灰黒色を呈している。胎土は石英、長石、角閃石など多種の鉱物細粒を含んでいるが精良である。焼成は良好である。縄文時代晩期後半の突帯文期に属するものであろう。福田町649-1、南トレンチ2層出土。

11は須恵器の甕破片である。外面には細かな長方形を呈す柁目板叩き痕、内面には青海波当て板痕を残している。胎土は精良で、微細な黒色粒子を含んでいる。色調は内外面ともに灰色で、焼成は良好である。古墳時代6～7世紀代の所産と思われる。小豆崎町1427北トレンチのピット18出土。

12は青花の碗で、見込み部分の厚さは1mmほどに薄く削りこまれている。文様は見込み部分は花卉文、外面植物文と思われる染付けを行い、外面高台際には1条の圏線を巡らしている。その後細かい気泡のある釉薬を掛け焼成している。高台径は54mmほどである。小豆崎町1206-1、東トレンチ出土。

13は青花碗の口縁片で小片のため口径は不明である。内外面に2条の圏線を巡らし、外面には植物文を線書きの後ダミを入れている。体部の調整は薄く仕上げられ、口縁部はやや外湾気味に収めている。小豆崎町1151、東トレンチ出土。

(注) 諫早市教育委員会 『風観岳支石墓群発掘調査報告書』 諫早市文化財調査報告書
第19集 2006



第21図 範囲確認調査検出遺物実測図 (1～8はS-2/3、9～13はS-1/3)

挿図	No.	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	出土地点		備考
							略記号		
21	1	剥片	22	26	10.5	3.8	07A Z、福田649-2-N. H		
21	2	剥片	28	23.5	10	4.9	07A Z、小豆崎1398-M		
21	3	削器	27	21	7	2.9	07A Z、小豆崎1151-W		
21	4	剥片	36	11	5.5	1	07A Z、福井649-1-S. H		
21	5	ト口ト口石器	31	30.5	8	4.9	07A Z、福田649-1-N. 6		
21	6	石鏃	27	23	4	1.4	07A Z、小豆崎1257-W		
21	7	石鏃	26	19	4.5	1.5	07A Z、小豆崎1398-S		
21	8	石鏃	16	14	3	0.4	07A Z、小豆崎1206-1-1		
21	9	土器					07A Z、福田649-1-S. H		縄文晩期
21	10	土器					07A Z、福田649-1-S、2層		縄文晩期
21	11	須恵器					07A Z、小豆崎1427-N、pit18		古墳後期
21	12	青花					07A Z、小豆崎1206-1-E		15～16世紀代
21	13	青花					07A Z、小豆崎1151-E		15～16世紀代

第6表 範囲確認調査遺物計測表

3. 範囲確認調査の総括

以上88トレンチの中で遺物包含層や遺構が検出された8トレンチ、及び包含層等から出土した遺物について概説した。

従来から山林として土地利用がなされた箇所については遺物を包含する層が残っており、さらに遺構が存在する可能性が高い。この地点を小字名から「中前後谷遺跡」として新規発見の遺跡として発見届を提出し、周知の遺跡として遺跡地図及び台帳に登載することとなった。しかし中山遺跡及び正津遺跡については畑として利用された部分は降雨水などによって流失した畑土を補うため下位の包含層から基盤層までを耕土化することによって、包含層及び遺構の遺存状態が良くないことが了解された。